

注 訳

# 訓讀説文解字注（十一）

森 賀 一 恵

富山大学人文科学研究第 77 号抜刷

2022年8月

## 訓讀說文解字注（十一）

森 賀 一 恵

「訓讀說文解字注（十）」に續いて、段玉裁『說文解字注』を訓讀し注を附す。

## 凡例

『訓讀說文解字注』金冊～匏冊に倣う。説解原文に（一）（二）（三）等の漢數字の番號を附したのは、段注の入るべき箇所を示したもので、説解原文、段注に1) 2) 3)等のアラビア數字の番號を附したのは、訓讀者注の被注箇所を示したものである。十三篇上は『繫傳』では缺けて大徐本により補われた卷二十五に當るが、今本の異同について記す。

## 十三篇上

## (糸部)

6b

纒，絲勞也<sup>(一)</sup>，从糸然聲<sup>(二)</sup>，

然，絲勞<sup>つか</sup>る也，糸に从ふ，然の聲，

(一)「勞」，『玉篇』「縈」に作る。<sup>1)</sup>蓋し『玉篇』を是と爲す。下文の「紆」と義近き也。或るひと曰く、「縈」篆<sup>2)</sup>何を以て此れに次せざるやと。曰く、後文「緝」<sup>3)</sup>「縈」等の篆皆な「繩」<sup>4)</sup>に続ぶ。<sup>5)</sup>「然」「紆」は則ち「絲」を謂ふ也。『廣韻』「絲勞る兒」に作る。<sup>6)</sup>

(二)如延の切，十四部。

紆，誦也<sup>(一)</sup>，从糸亏聲<sup>(二)</sup>，一曰，縈也<sup>(三)</sup>，

紆，誦<sup>ま</sup>がる也，糸に从ふ，亏の聲，一に曰く，縈<sup>めぐ</sup>る也，

1) 糸部第四百二十五「纒，如延切，絲勞也」。

2) 十三篇上 29a 糸部「縈，收卷也」。但し大徐は「卷」を「縈」に作る。段注に「卷，居轉切，各本作縈，非也，今依韻會，玉篇正，凡舒卷字，古用縈曲之卷，今用氣勢之捲，非也，收卷長繩，重疊如環，是爲縈，於營切，今俗語尙不誤，詩周南，葛藟縈之，傳曰，縈，旋也」。

3) 十三篇上 29a 糸部「緝，紆未縈繩，……」。

4) 十三篇上 28b 「繩，索也」。

5) 「繩」篆「緝」篆「縈」篆の順に配列され，繩に關わる「紆」篆「緝」篆「縈」篆がそれに續く。

6) 下平二仙・然（如延切）小韻「纒，絲勞兒」。

(一)「詘」なる者は「詰詘する也」<sup>7)</sup>。今人は「屈曲」の字を用ひ、古人は「詰詘」<sup>8)</sup>を用ひ、亦た「詘」字を單用す。『易』に曰く、「往く者は詘する也。來る者は信ぶる也」。<sup>9)</sup> 詘は之を「紆」と謂ふ。考工記に「連行、紆行」と。<sup>10)</sup> 亦た或いは「汙」<sup>11)</sup>を段りて之と爲す。『左傳』に曰く「盡くして汙げず」と。<sup>12)</sup>

(二) 億俱の切、五部。

(三)「綦」なる者は之を環らして相ひ積む。「紆」は則ち之を曲ぐるのみ。故に別に一義と爲す。「緯」下に云ふ「紆げて未だ綦さざる繩」<sup>13)</sup>と。證とす可し。

緯，直也<sup>(一)</sup>，从糸委聲，讀若陘<sup>(二)</sup>，

緯(緯)，直き也，糸に从ふ，委の聲，讀みて陘の若くす，

(一)『廣韻』に云ふ、「緯緯」と。<sup>14)</sup>

(二) 胡頂の切、十一部。

織，紵也<sup>(一)</sup>，从糸戠聲<sup>(二)</sup>，

織，紵也，糸に从ふ，戠の聲，

(一)「細」なる者は「敷也」。<sup>15)</sup> 魏風「摻摻たる女手」<sup>16)</sup>、『韓詩』「織織たる女手」に作り<sup>17)</sup>、毛傳「摻摻は猶ほ織織のごとき也」と曰ふ。『尚書』「厥の筐は玄き織縞」、鄭注して「織は細也」と。<sup>18)</sup> 『漢』文紀遺詔に「織は七日にして服を釋け」、服虔注して「織は細布」と。<sup>19)</sup> 凡そ細きは之を

7) 三篇上 29b 言部「詘」説解。段注に「二字雙聲，屈曲之意」。

8) 『説文』敍に「象形者畫成其物隨體詰詘」。『漢書』藝文志・六書略・小學「教之六書」顔注は「詘」を「屈」に作る。

9) 繫辭傳下。阮元本は「詘」を「屈」に作る。釋文も「屈也，丘勿反，下同」。

10) 梓人。注に「紆行，蛇屬」，疏に「云紆行蛇屬者，紆，曲也，以其蛇行屈曲，故謂之紆行也」。釋文に「紆行，乙俱反，李又香于反」。

11) 十一篇上二 29a 水部「叢也，从水亏聲，一曰小池爲汙，一曰塗也」。

12) 成公十四年傳。注「謂直言其事，盡其事實，無所汙曲」。釋文「不汙，憂于反，曲也，注同」。

13) 注 3) 參照。

14) 上四十一迥・緯(胡頂切)小韻「緯，緯緯」。『廣韻』は「緯」を「緯」に作る。

15) 下篆説解參照。各本「敷」を「微」に作る。

16) 葛屨。釋文「摻摻，所銜反，又所感反，徐又息廉反，説文作攢，山廉反，云好手貌」「織織，息廉反」。十二篇上 21a 手部「攢，好手兒」段注に「傳以今喻古故曰猶，其字本作攢，俗改爲摻，非是，遵大路傳曰，摻，擊也，是摻字自有本義」。『説文』に「摻」字は無いが，段玉裁は遵大路の孔疏に據って手部末に「摻」字を補う。(十二篇上 (55b))

17) 『文選』卷 29 古詩十九首第二「織織出素手」李善注に「韓詩曰，織織女手，可以縫裳，薛君曰，織織，女手之貌，毛萇曰，摻摻猶織織也」。

18) 禹貢。釋文「織，息廉反」。

19) 顔注引く服虔注「織，細布衣也」。『史記』孝文本紀の集解引く服虔注同じ。

「織」と謂ふ。其の字或いは「織」に作る。『漢』食貨志此くの如し。<sup>20)</sup>『荀卿子』<sup>センリ</sup>「織驪」<sup>21)</sup>、『列子』<sup>タウリ</sup>「盜驪」に作る。<sup>22)</sup>『穆天子傳』「盜驪」郭注して「馬の細き頸爲り、驪は黒色也」と。<sup>23)</sup>『廣雅』<sup>タウリ</sup>「駢驪」に作る。<sup>24)</sup>「駢」なる者は<sup>アウナウ</sup>駢<sup>26)</sup>脩長の謂ひ。<sup>27)</sup>「盜」<sup>タウ</sup>「駢」は同聲<sup>28)</sup>、「織」<sup>タウ</sup>「駢」は同義也。

(二) 息廉の切、七部。

7a

細、敝也<sup>(一)</sup>，从糸囟聲<sup>(二)</sup>，

細（細），敝也，糸に従ふ，囟の聲，

(校)「敝」，二徐本「微」<sup>29)</sup>に作る。

(一)「敝」なる者は「眇也」<sup>30)</sup>。「眇」<sup>31)</sup>は今の「妙」字。

(二) 穌計の切、十五部。

緇、黧絲也<sup>(一)</sup>，从糸苗聲<sup>(二)</sup>，周書曰，惟緇有稽<sup>(三)</sup>，

緇，黧の絲也，糸に従ふ，苗の聲，周書に曰く，惟れ緇を稽ふる有りと，

(校)「黧」，二徐本「旒」に作る。

20) 食貨志上「古之治天下，至織至悉也」顔注に「織，細也，悉，盡其事也，織與織同」。

21) 性惡篇「駢驪、驪、織離、緑耳，此皆古之良馬也」楊倞注に「織離，即列子盜驪者也」。『荀子』各本「驪」を「離」に作る。

22) 周穆王篇「左驂盜驪」殷敬慎釋文に「驪，力移反，盜驪即荀子之織離者也」。

23) 六卷本卷1。

24) 釋詁。『廣雅』各本「驪」を「驪」に作る。疏證は『史記』秦本紀は「溫驪」（徐廣「溫，一作盜」）に作り，『爾雅』『穆天子傳』は「盜驪」に作り，『玉篇』は「桃驪」に作り，『集韻』は「駢驪」に作るという。

25) 『周禮』夏官・廋人「教駢」注に「鄭司農云，馬三歲曰駢」釋文に「教駢，音兆，又音道，字林音桃」。夏官・校人「執駢」注引く鄭司農注同じ。釋文に「駢，徐音肇，劉音道，李湯堯反，沈徒刀反」。

26) 『大廣益會玉篇』長部第四百四十四に「駢，於倒、於到二切，駢，長也，猝也」「駢，乃倒、徒到二切，長也」，また『廣韻』上三十二皓・襖（烏皓切）小韻に「駢，駢駢，長也」瓘（奴皓切）小韻に「駢，駢駢，長也」。

27) 『廣雅』釋詁四「元、良、倅、龍、駢、堅，長也」疏證に「駢之言佻佻然也，鄭衆注周官校人云，馬二歲曰駢，三歲曰駢，駢，駢竝音徒皓反，其義同也，駢之言夭天然也，……，佻與駢，夭與駢亦同義」。

28) とともに定母。

29) 二篇下 15a 彳部「微，隱行也」，段注に「敝訓眇，微从彳，訓隱行，段借通用微而敝不行」。

30) 八篇上 19a 人部「敝」の段注本の説解。二徐は「眇」を「妙」に作る。段注に「眇各本作妙，今正，凡古言敝眇者，即今之微妙字，眇者小也，引伸爲凡細之稱，微者隱行也，微行而敝廢矣」。

31) 四篇上 12a 目部「眇，小目也」，但し二徐は「一目小也」，段注に「各本作一目小也，誤，今依易釋文正，履六三，眇能視，虞翻曰，離目不正，兌爲小，故眇而視，方言曰，眇，小也，淮南說山訓，小馬大目不可謂大馬，大馬之目眇謂之眇馬，物有似然而似不然者，按眇訓小目，引伸爲凡小之稱，又引伸爲微妙之義，說文無妙字，眇即妙也，史記，戶說以眇論，即妙論也，周易，眇萬物而爲言，陸機賦，眇衆慮而爲言，皆今之妙字也」。段注の依る「易釋文」（履六三，眇能視）は「眇，妙小反，字書云盲也，說文云小目」。

(一)「鰲」各本「旄」<sup>32)</sup>に作る。俗改むる所也。「鰲」なる者は「鰲牛の尾也」<sup>33)</sup>。凡そ羽旄は古へ當に「羽旄」に作るべし。「鰲の絲」なる者は、鰲牛の尾の絲至りて細き者也。故に「織」「細」二篆の後に次す。『賈子』容經「跗旋の容」に「旄なること絲を濯ふが如し」と。<sup>34)</sup>「旄」は「緇」<sup>ベウ</sup>に同じ。細きこと絲を濯ふが如きを言ふ也。

(二) 武儻の切、二部。

(三) 甫荆<sup>35)</sup>の文。今本「緇」を「貌」<sup>バウ</sup>に作る。僞孔傳に云ふ「惟だ其の貌を察<sup>み</sup>る」<sup>36)</sup>と。按ずるに許據る所の壁中文は、蓋し惟だ豪鰲をのみ是れ審らかにするを謂ふ也。

緇，參緇也<sup>(一)</sup>，从糸𦉳聲<sup>(二)</sup>，

緇，參緇也，糸に从ふ，𦉳の聲，

(一)「參」は或「𦉳」字<sup>37)</sup>。此ここに「參差」と曰ひ、木部に「參差」<sup>38)</sup>と曰ひ、竹部に「參差」<sup>39)</sup>と曰ひ、又た「參差たる管樂」<sup>40)</sup>と曰ふ。皆な長短齊しからざる兒也。皆な雙聲字。『集韻』<sup>41)</sup>、『類篇』<sup>42)</sup>皆な『説文』を引きて「參緇也，絲亂るる兒を謂ふ」と。『韻會』「差」字下に於いて『説文』を引きて「參差，絲亂るる兒」と。<sup>43)</sup>蓋し古本此の三字有り。

(二) 楚宜の切、古音は十七部に在り。<sup>44)</sup>

32) 七篇上 20b 𦉳部「旄，幢也」段注に「以鰲牛尾注旗竿，故謂此旗爲旄，因而謂鰲牛尾曰旄，謂鰲牛曰旄牛，名之相因者也」。

33) 二篇上 11a 鰲部「鰲」の説解。段注に「凡經云干旄、建旄、設旄、右秉白旄、羽旄齒革、干戚羽旄，今字或有誤作毛者，古注皆云旄牛尾也，旄牛即鰲牛，鰲牛之尾名鰲，以鰲爲幢曰旄，因之呼鰲爲旄，凡云注旄干首者是也，呼鰲牛爲旄牛，凡云旄牛尾者是也」。

34) 『新書』容經に「旋以微磬之容，其始動也，穆如驚條，其固復也，旄如濯絲，跗旋之容也」。

35) 呂荆。

36) 僞孔傳には續いて「有所考合」という。

37) 「𦉳」の或體の意か。七篇上 23a 晶部に「𦉳，商星也，……，𦉳，或省」。「𦉳」段注に「即今用參兩、參差字也，凡參參𦉳字用爲聲」。

38) 六篇上 26a 木部に「，長木兒，……，詩曰，參差荇菜是也」。「詩」は周南・關雎。阮元本は「參」を「參」に作る。段注に「許所據作參，謂如木有長有短不齊也」。

39) 五篇上 3a 竹部「簾，參差也」。但し二徐は「差」上に「簾」字無し。段注に「各本差上無簾，此淺人謂爲複舉字而刪之也，……，蓋物有長有短則參差不齊，竹木皆然，今人作參差，古則从竹，从木也」。

40) 五篇上 17b 竹部「簾」の説解。段注に「言管樂之列管參差者，竿笙列管雖多而不參差也」。

41) 上平五支・差（又宜切）小韻「緇，説文參緇也，謂亂絲貌」。「又」は「又」字の誤りか？

42) 卷 13 上。「緇，義宜切，説文參緇也，謂亂絲兒」。「義」は「又」の俗字體。『字鑑』九麻に「又，初牙切，説文手指相錯也，从又象又之形，俗作又」。

43) 平聲上四支に「差，義宜切，……，又參差不齊也，説文亂絲貌，……」。段注引く所と異なる。

44) 古十七部諧聲表では𦉳聲は十七部，今韻古分十七部表では楚宜切（支韻）は十六部。『六書音均表』一・弟十七部獨用説に「古弟十七部之字多轉入於支韻中」。

7b

緡，緡冤也<sup>(一)</sup>，从糸番聲<sup>(二)</sup>，

緡，緡冤する也，糸に从ふ，番の聲，

(校) 大徐本「緡」字無く，「冤」を「冕」に作る。

(一) 三字句。各本「緡」字無し。「冤」を「冕」に作る。今補正す。『玉篇』「緡」下に「冤也」と曰ふ。<sup>45)</sup>『集韻』<sup>46)</sup>引く『説文』同じ。蓋し「緡」字を複字爲りと謂ひて之を刪る。「緡冤」疊韻の古語爲るを知らず。『集韻』<sup>47)</sup>、『類篇』<sup>48)</sup>皆な曰く「緡緡は亂也」と。是れ「冤」は俗に「緡」に作る也。巾部に「幡」**𦉳**二篆有り，亦た是れ疊韻，小兒「觚を拭ふ布也」。<sup>49)</sup>此れ亂を謂ふ也。仍りて當に「亂」字を補ふべし。下文二篆皆な「亂」と訓ず。

(二) 附袁の切，十四部。

縮，亂也<sup>(一)</sup>，从糸宿聲<sup>(二)</sup>，一曰蹴也<sup>(三)</sup>，

縮，亂るる也，糸に从ふ，宿の聲，一に曰く，蹴む也，

(一) 釋詁に曰く「縮は亂也」。<sup>50)</sup>『通俗文』に云ふ「物申びざるを縮と曰ふ」。<sup>51)</sup>申びざれば則ち亂る。故に亂るる也と曰ふ。申びざる者之を申ぶれば則ち直きなり。『禮記』「古者，冠は縮に縫ふ」<sup>52)</sup>。『孟子』「自らを反りみて縮し」<sup>53)</sup>は皆な直を謂ふ也。亂るる者は之を治む。『詩』に

45) 糸部第四百二十五「緡，扶元切，冤也」。

46) 上平二十二元・煩（符袁切）小韻に「緡，説文冤也，一曰亂也」，また翻（孚袁切）小韻に「緡，續緡，風吹旗也，緡緡，亂也」，上平二十六桓・槃（蒲官切）小韻に「緡，亂也，冤也」。

47) 翻（孚袁切）小韻。上注参照。

48) 卷13上「緡，孚袁切，續緡，風吹旗也，緡緡，亂也，又符袁切，又蒲官切」。

49) 七篇下49bに「**𦉳**，幡也」，段注に「**𦉳**與幡同物，拭觚布也，廣韻緡字下云，緡**𦉳**，亂取，此今義，非許義」。「於袁切，十四部」また50aに「**𦉳**，書兒拭觚布也」段注に「拭觚之布謂之**𦉳**，亦謂之**𦉳**，反覆可用之意」。「甫煩切，十四部」。「**𦉳**」字段注は「緡」字段注と説が異なるようである。

50) 釋詁下に「縱、縮、亂也」，注に「縱放、掣縮，皆亂法也」。

51) 玄應『一切經音義』卷15・僧祇律第四卷「毳拈」下に「通俗文，縮小曰**瘵**，物不申曰**棺**柄。積砂藏本は「**棺**」を「縮」に作る。

52) 檀弓上。下文に「今也衡縫」，注に「縮，從也，今禮制衡讀爲橫，今冠橫縫，以其辟積多」。

53) 公孫丑上。注に「縮，義也」。

曰く「版を縮して以て載す」<sup>54)</sup>と、『爾雅』<sup>55)</sup>、毛傳<sup>56)</sup>皆な曰く「之を繩するは之を之を縮すと謂ふ」と。縮を治むるを縮と曰ふは猶ほ亂を治むるを亂と曰ふ<sup>57)</sup>がごとき也。

(二) 所六の切，三部。

(三) 「蹶」なる者は「躡む也」<sup>58)</sup>。「躡」なる者は「踏む也」<sup>59)</sup>。「踏」なる者は「踞む也」<sup>60)</sup>。「踞」なる者は「躡む也」<sup>61)</sup>。凡そ足掌地に迫り遽に起きざるを「踞」と曰ふ。是を以て「蹶鞠」は之を「躡鞠」と謂ふ。<sup>62)</sup> 踞りて之を起こす也。『論語』「足縮縮として循ふこと有るが如し」、鄭注して曰く「前を舉げ踵を曳きて行く也」と。<sup>63)</sup> 踵を曳きて行けば遽に起きず。故に「縮縮」と曰ふ。俗に「蹠蹠」に作るは非。「踵」は足の「跟也」<sup>64)</sup>。

𨮒，亂るる也，从糸文聲<sup>(一)</sup>，商書曰，有條而不紊<sup>(二)</sup>，

紊，亂るる也，糸に従ふ，文の聲，商書に曰く，條有りて紊れずと，

(一) 亡運の切，十三部。

54) 大雅・緜「其繩則直，縮版以載」阮元校勘記に「其繩則直，唐石經、小字本、相臺本同，案釋文云，繩，本或作乘，後人誤改經文，是也」。傳「言不失繩直也，乘謂之縮」箋「繩者營其廣輪方制之正也，既正，則以索縮其築版，……，乘，聲之誤，當爲繩也」。釋文に「其繩，如字，本或作乘，案經作繩，傳作乘，箋云，傳破之乘字，後人遂誤改經文」，阮元校勘記に「箋云，傳破之乘字，釋文校勘記，通志堂本同，盧本之作爲，案爲字誤改也，此傳破二字誤倒耳，當作破傳，陸意謂箋之所云乃破傳之乘字也，傳未嘗破經爲乘，箋又無此云，盧文弨全誤」，法偉堂『校記遺稿』に「案阮說是」。『毛詩故訓傳定本小箋』卷二十三「乘謂之縮」下に「箋云，乘當爲繩」。

55) 釋器「大版謂之業，繩之謂之縮之」注「縮者約束之，詩曰，縮版以載」。

56) 毛傳は「乘謂之縮」，箋に「乘，聲之誤，當爲繩也」。注54) 参照。

57) 「治亂曰亂」という形では『尚書』説命中「惟以亂民」泰誓中「予有亂臣十人」の蔡沈『集傳』に見えるが、「亂，治也」という訓は『爾雅』釋詁下に見え，反訓の例としてよく知られている。『説文』十四篇下乙部も「亂，治也，从乙，乙，治之也，从鬲」とするが，段玉裁は「亂」の説解を「不治也，从乙鬲，乙，治之也」に改め，「亂本訓不治，不治則欲其治，故其字从乙，乙以治之，謂詘者達之也，轉注之法，乃訓亂爲治，如武王曰予有亂十人是也，爰部鬲，不治也，幺子相亂，爰治之也，文法正同」(十四篇下20a) という。

58) 二篇下26b 足部「蹶」説解。

59) 二篇下26b 足部「躡」説解。

60) 二篇下27a 足部「踏」の説解は「踐也」。「踞也」は典據不明。

61) 二篇下27a 足部「踞」説解。

62) 『史記』蘇秦傳「蹶鞠」集解に「劉向別錄曰，蹶鞠者傳言黃帝所作，或曰起戰國之時，蹶鞠，兵勢也，所以練武士，知有材也，皆因嬉戲而講練之，蹶，徒獵反，鞠，求六反」。索隱に「上徒臘反，下居六反，別錄注云，蹶蹠，促六反，蹶亦蹶也」。

63) 鄉黨。阮元本は「縮」を「蹠」に作り，「踵」を「踵」に作る。

64) 二篇上39b 止部に「踵，跟也」。二篇下足部に「跟，足踵也」(24a) (二徐は「踵」を「踵」に作る)，「踵，追也，……，一曰，往來兒」(27a) 段注に「與止部踵別」。

（二）般庚上の文。<sup>65)</sup>

綯，絲次第也<sup>(一)</sup>，从糸及聲<sup>(二)</sup>，

級，絲の次第也，糸に从ふ，及の聲，

（一）本と「絲の次第」を謂ふ。故に其の字糸に从ふ。引申して凡そ次第の稱と爲す。階の次第，曲禮に云ふ「級を拾り足を聚め，連歩して以て上る」<sup>66)</sup>は是れ也。尊卑の次第，賈生云ふ「等級分明にして天子これに加はる、故に其の尊及ぶべからず」<sup>67)</sup>は是れ也。『後漢書』注に「秦の法に、斬首多き者は爵一級を進む。因りて斬首を謂ひて級と爲す」と。<sup>68)</sup>

（二）居立の切，七部。

8a

縶，聚束也<sup>(一)</sup>，从糸尙聲<sup>(二)</sup>，

總，聚めて束ぬる也，糸に从ふ，尙の聲，

（一）聚めて而して之を縛るを謂ふ也。「尙」散意有り。糸以て之を束ぬ。禮經の「總」は束髮也。<sup>69)</sup>禹貢の「總」は禾の束也。<sup>70)</sup>之を引申して凡そ兼綜の稱と爲す。

（二）作孔の切，九部。俗に「惣」に作り，又た譌りて「惣」に作る。<sup>71)</sup>

𦍋，約也<sup>(一)</sup>，从糸具聲<sup>(二)</sup>，

𦍋<sup>つか</sup>，約ぬる也，糸に从ふ，具の聲，

（一）革部に曰く「直轅は𦍋縛す」と。<sup>72)</sup>「𦍋」<sup>73)</sup>當に「𦍋」に爲るべし。大車の衡は之を約ぬるのみ。三束を必せず。

（二）居玉の切，三部。

65) 僞孔傳に「紊，亂也」。

66) 曲禮上。注に「級，等也」，疏に「拾級聚足者，此上階法也」，釋文に「拾，依注音涉」。「級，音急，階等」。

67) 上疏。『漢書』賈誼傳。

68) 光武帝紀上「光武奔之，斬首數十級」注に「秦法，斬首一，賜爵一級，故因謂斬首爲級」。

69) 『儀禮』喪服「女子子在室爲父，布總、箭筓、鬢、衰，三年」注「總，束髮，謂之總者，既束其本，又總其末」。

70) 「五百里甸服，百里賦納總，……」僞孔傳「禾稟曰總，入之供餉國馬」。釋文「總，音惣」。『史記』夏本紀「百里賦納總」索引は『説文』を引いて「總，聚束草也」。

71) 『廣韻』上一董・總（作孔切）小韻「總」下に「惣，上同，惣，俗」。

72) 三篇下 5a 革部に「𦍋，車衡三束也，曲轅纏縛，直轅𦍋縛」。但し，大徐本は「𦍋」を「𦍋」に作る。段注に「𦍋之言𦍋也，𦍋，約也」。

73) 十四篇上 49a 車部「𦍋，直轅𦍋車也」段注に「韻會作直轅車也，無𦍋字爲是，當從之，直轅車，大車也」。

紵，纏束也<sup>(一)</sup>，从糸勺聲<sup>(二)</sup>，

約，まと纏ひ束ぬる也，糸に从ふ，勺の聲，

(一)「束」なる者は「縛る也」<sup>74)</sup>。引申して儉約と爲す。

(二) 於略の切，二部。

縑，纏也，从糸奈聲<sup>(一)</sup>，

縑，纏ふ也，糸に从ふ，奈の聲，

(一) 盧鳥の切，二部。

纏，繞也，从糸塵聲<sup>(一)</sup>，

纏，まと繞ふ也，糸に从ふ，塵の聲，

(一) 直連の切，十四部。

縑，纏也，从糸堯聲<sup>(一)</sup>，

縑，纏ふ也，糸に从ふ，堯の聲，

(一) 而沼の切，二部。

紵，紵轉也<sup>(一)</sup>，从糸參聲<sup>(二)</sup>，

紵，シテン紵轉也，糸に从ふ，參の聲，

(校)「紵轉也」，二徐本「轉也」に作る。

(一)「紵」字各本無し。今補ふ。此の三字句なり。上文「緡冤也」<sup>75)</sup>と例を一にす。淺人之を刪る。「離黄は倉庚也」の「離」を刪り，<sup>76)</sup>「襍周は燕也」の「襍」を刪る<sup>77)</sup>が如きのみ。「紵轉」は蓋し古語。鄭司農考工記注の「ヂン縛」<sup>78)</sup>は即ち紵轉二字也。凡そ了戾<sup>79)</sup>を「紵轉」と曰ひ，亦た單評して「紵」と曰ひ，亦た「軫キョク軛シ(牛力の反<sup>80)</sup>)」と曰ふ。考工記「老牛の角はシにして

74) 六篇下 8b 束部「束」説解。

75) 十三篇上 7b「緡」。p.93 参照。

76) 四篇上 27a 佳部「離，離黄，倉庚也」。但し，二徐本は「離，黄倉庚也」。

77) 四篇上 24b 佳部「襍，襍周，燕也」。但し，二徐本は「襍，周燕(鷺)也」。

78) 『周禮』考工記・弓人「老牛之角ヂン而昔」注「鄭司農云，紵讀爲ヂン縛之ヂン」校勘記「余本、岳本、監本同，嘉靖本、閩毛本，縛作縛，釋文，縛，徒轉反」。釋文「紵，劉徒展反，許慎尚展反，又徒展反，與注ヂン縛之ヂン同，角絞縛之意」ヂン縛，並與ヂン同，縛，又徒轉反」。

79) 十四篇下 26b 了部「了，苞也」段注に「凡物二股或一股，結糾ヂン縛不直伸者，曰了戾」。

80) 『博雅音』「軛」音注。

昔たり」鄭司農云く「紵は讀みて<sup>ツク</sup>拵轉の拵と爲す」と。『孟子』<sup>ふたた</sup>兩<sup>ね</sup>び「兄の臂を<sup>ね</sup>拵づ」<sup>81)</sup>と云ひ、趙注して皆な「戾也」と云ふ。『淮南』原道訓「拵抱」高注して「了戾也」と。<sup>82)</sup>「拵抱」、『廣雅』「軫輓」に作り、「轉戾也」と云ふ。<sup>83)</sup>『方言』に曰く「軫は戾也」、郭注して「相ひ了戾する也。江東の音は善」<sup>84)</sup>と。

(二)之忍の切、十二部。按ずるに『周禮』の釋文に云く「劉徒展の反、許慎尙展の反、又た徒展の反」と。此れ『說文』の舊音也。尙展一反は即ち景純謂ふ所の「江東の音は善」也。徒展一反は今の語言に近しと爲す。

8b

纒、落也<sup>(一)</sup>、从糸巽聲<sup>(二)</sup>、

纒、<sup>から</sup>落む也、糸に从ふ、巽の聲、

(一)「落」<sup>85)</sup>なる者は今の「絡」字。古へ「落」を段りて「絡」に作らず。包絡を謂ふ也。『莊子』「馬首を<sup>つな</sup>落ぐ」<sup>86)</sup>、『漢書』「虎落」<sup>87)</sup>皆な「落」に作る。木落つれば乃ち物成るの象。故に「落成」と曰ひ、「包落」と曰ふ。皆な成就の意に取る也。馬融の傳に曰く「四野の飛征を纒囊す」と。李注『說文』を引き、又た『國語』「山を纒りて牢有り」賈逵注に「纒は還也」と云ふを引く。<sup>88)</sup>按ずるに「還」「環」は古今字。古へ「還」を用ひて「環」を用ひず。『國語』「纒於山有牢」、今本譌りて「環山於有牢」に作る。韋注して曰く「環は繞也」と。<sup>89)</sup>「山」「於」誤倒し、「環」は俗字爲り。蓋し韋氏の誤りに非ずして淺人轉寫の致す所也。古書の馳繆知るべからざる者多きを知る。

81) 告子下。盡心上に「紵其兄之臂」。

82) 「扶搖拵抱羊角而上」注「拵抱、引戾也」。今本は「了」を「引」に作る。十二篇下(61a)弦部に「**盤**、彌戾也、从弦省、从盤、盤、了戾之也、讀若戾」。但し、「盤、了戾之也」五字は、大徐本には無く、小徐本は「盤」を「**盤**」、「了」を「引」に作る。段注に「今淮南注了戾、道藏不誤、而俗刻作引戾、正與此誤同」。

83) 釋訓。王念孫『疏證』は「輓」は「輓」の誤りとする。

84) 卷三。

85) 一篇下 38b 艸部「落、凡艸曰零、木曰落」段注に「落亦爲籬落、纏絡字、木部、柀、落也、糸部、纒、落也、是也」。

86) 秋水。

87) 鼂錯傳。注に「鄭氏曰、虎落者、外蕃也、若今時竹虎也、蘇林曰、作虎落於塞要下、以沙布其表、旦視其迹、以知匈奴來入、一名天田、師古曰、蘇說非也、虎落者、以竹箴相連遮落之也」。また李廣傳「上召禹、使刺虎、……、禹從落中以劍斫**絕**纒、欲刺虎」注に「落與絡同、謂當時纏絡之而下也」。

88) 『後漢書』馬融傳。廣成頌。李賢注「纒、音胡犬反、又胡申反、說文曰、纒、落也、國語曰、纒於山有牢、賈逵注云、纒、還也、囊、囊也、音託、四野、四方之野、飛征、飛走也」。今本『後漢書』注は「牢」を「罕」に作る。

89) 齊語。

(二) 胡吠の切，十四部。李賢「又た胡串の反」<sup>90)</sup>。

辮，交也<sup>(一)</sup>，从糸辨聲<sup>(二)</sup>，

辮，交ふる也，糸に从ふ，辨の聲，

(一) 玄應引きて「之を交へ織る也」に作る。<sup>91)</sup>終軍の傳に曰く「辮髮を解き，左衽<sup>のぞ</sup>を削く」と。<sup>92)</sup>

『三蒼』「編」を段りて之と爲す。<sup>93)</sup>

(二) 分かちて合する也。故に辨に从ふ。形聲中に會意有る也。頻犬の切，十四部。

結，締也，从糸吉聲<sup>(一)</sup>，

結，締<sup>ひす</sup>ぶ也，糸に从ふ，吉の聲，

(一) 古屑の切，十二部。古へ「髻」字無し。即ちこれを用ふ。髟部に見ゆ。<sup>94)</sup>

緡，結也<sup>(一)</sup>，从糸骨聲<sup>(二)</sup>，

緡，結ぶ也，糸に从ふ，骨の聲，

(一) 『玉篇』に云く「結びて解けず」<sup>95)</sup>と。

(二) 古忽の切，十五部。

9a

締，結不解也<sup>(一)</sup>，从糸帝聲<sup>(二)</sup>，

締，結びて解けざる也，糸に从ふ，帝の聲，

(一) 「解」なる者は「判也」<sup>96)</sup>。下文に曰く「紐」は「結びて解く可き也」<sup>97)</sup>と。故に結びて解くべからざる者を「締」と曰ふ。

---

90) 注 88) 参照。

91) 玄應『一切經音義』卷 14 四分律第十六卷「辮髮」下に「三蒼，亦編字，同，……，説文，辮，交織也」，卷 18 法勝阿毗曇論第二卷「辮髮」下同。反切は卷 14 「平典反」，卷 18 「蒲典反」。「之」字は無い。

92) 今本『漢書』は「辮」を「編」に作る。顔注に「編讀曰辮」。

93) 注 91) 参照。また，玄應『一切經音義』卷八維摩詰經上卷「編髮」下に「三蒼，古文辮字同，蒲典反」。

94) 九篇上 25a 髟部「髻，臥結也」段注に「結，今之髻字也，士冠禮采衣紵注云，古文紵爲結，按許書皆作結，鄭注經皆作紵，鄭依今文禮，許依古文禮，故糸部有結無紵也」。髟部には「髻」の説解のほか、「髻，結也」(25a)、「髻，髻帶，結頭飾也」(25a) (二徐の説解は「帶結 (小徐は「髻」に作る) 飾也)、「髻，簪結也」(25b)、「髻，喪結也」(28a) (二徐は「也」字無し) に、「髻」の義で用いられる「結」が見える。小徐祁刻本は髟部の説解の「結」をすべて「髻」に作る。

95) 『大廣益會玉篇』糸部第四百二十五に「緡，古忽切，結不解」。

96) 四篇下 58a 角部「解」説解。

97) 十三篇上 22b 「紐，系也，一曰，結而可解」。

（二）特計の切，十六部。

縶，束也<sup>(一)</sup>，从糸專聲<sup>(二)</sup>，

縛，束ぬる也，糸に从ふ，專の聲，

（一）「束」下に曰く「縛也」<sup>98)</sup>と。此れと轉注爲り。之を引申し，以て之を縛る所の物も亦た「縛」と曰ふ。

（二）符鑿の切，五部。

縶，束也，从糸崩聲<sup>(一)</sup>，墨子曰<sup>(二)</sup>，禹葬會稽，桐棺三寸，葛呂縶之<sup>(三)</sup>，

縶，束ぬる也，糸に从ふ，崩の聲，墨子に曰く，禹會稽に葬られ，桐棺三寸，葛呂て之を縶ぬと，

（一）補盲の切，古音は六部に在り。<sup>99)</sup>

（二）『漢』志に「墨子七十一篇，名は翟，宋大夫爲り，孔子の後に在り」と。<sup>100)</sup>

（三）今『墨子』節葬篇に此の句三見し，皆な「緘」に作る。<sup>101)</sup>古へ蒸、侵二部音轉じて取も近き也。<sup>102)</sup>鄭『禮記』に注して曰く「齊人棺束を謂ひて緘と爲す」と。<sup>103)</sup>

紱，急也<sup>(一)</sup>，从糸求聲<sup>(二)</sup>，詩曰，不競不紱<sup>(三)</sup>，

紱は急也，糸に从ふ，求の聲，詩に曰く，競ならず紱ならずと，

（一）『毛詩』の傳に曰く「紱は急也」と。<sup>104)</sup>『左傳』杜注之に従ふ。<sup>105)</sup>後儒異を好みて乃ち「緩」を以て「紱」を釋す。<sup>106)</sup>字義字音に洽はず。「紱」の言は糾<sup>キウ</sup>也。<sup>107)</sup>

（二）巨鳩の切，三部。

98) 六篇下 8b 束部「束」説解。

99) 「補盲切」（庚韻）は今韻古分十七部表では十一部，朋聲は古十七部諧聲表では六部。

100) 諸子略・墨家。

101) 今本は「縶」を「緘」に作り，上文の堯、舜の葬も「穀木之棺，葛以緘之」に作る。『太平御覽』卷 82 帝王部七夏禹に『墨子』を引いて「緘」を「縶（補庚切）」に作る。また，『藝文類聚』卷 11 帝王部一帝禹夏后氏に『帝王世紀』を引いて「葛以縶之」に作る。孫詒讓『問詁』は「緘當爲縶」といい，根據に『説文』、『太平御覽』、『藝文類聚』の引用，「縶」字段注を擧げる。

102) 崩聲は六部（蒸部），咸聲は七部（侵部）。『六書音韻表』一「古十七部本音説」に「弟六部蒸韻，音轉入於優」。

103) 喪大記「凡封，用紱去碑，負引，君封以衡，大夫士以咸」注に「今齊人謂棺束爲緘繩，咸作爲緘」。阮元本は「緘」下に「繩」字有り。釋文「以咸，依注讀爲緘，古鹹反」「爲緘，古咸反，一本作緘」。

104) 商頌・長發。釋文「不紱，音求，徐音糾，急也」。

105) 昭公二十年傳「詩曰，……，又曰，不競不紱，……」注。

106) 朱熹『詩集傳』。

107) 三篇上 (5a) 糾部「糾，繩三合也」段注「凡交合之謂之糾，引伸爲糾合諸侯之糾，又爲糾責之糾」。

(三) 商頌・長發の文。

綱，急引也<sup>(一)</sup>，从糸同聲<sup>(二)</sup>，

綱，急に引く也，糸に从ふ，同の聲，

(一) 此れ本義也。中庸に「詩に曰く，錦を衣て綱を尙ふ」と。<sup>108)</sup> 此れ段借して「褻」<sup>109)</sup> 字と爲す也。

(二) 古熒の切，十一部。

緝，**楸**絲也<sup>(一)</sup>，从糸斥聲<sup>(二)</sup>，

緝，**楸**絲也，糸に从ふ，斥の聲，

(一) 「**楸**」各本「**散** (**戡**)」<sup>110)</sup> に作る，今正す。「**楸**は分離する也」。<sup>111)</sup> 「水の**褻**流別」<sup>112)</sup> を「**斥**」と曰ひ，「別水」<sup>113)</sup> を「**派**」と曰ひ，「血理」の分を「**脈**」と曰ひ<sup>114)</sup>，「**散**絲」を「**緝**」と曰ふ。『廣韻』に曰く「未だ緝まざる麻也」と。<sup>115)</sup>

(二) 匹卦の切，十六部。

9b

縑，不均也<sup>(一)</sup>，从糸羸聲<sup>(二)</sup>，

縑，均しからざる也，糸に从ふ，羸の聲，

(一) 此れ「**類**」<sup>116)</sup> と雙聲，其の義亦た相ひ近し。

(二) 力臥の切，十七部。

綈，相足也<sup>(一)</sup>，从糸合聲<sup>(二)</sup>，

108) 注「禪爲綱，錦衣之美」，釋文に「尚綱，本又作**綱**，詩作褻，同，口迺反，徐口定反，一音口穎反」。

109) 八篇上 54b 衣部「褻，籀衣也」(二徐は「衣」字無し)，段注に「籀者臬屬，績爲衣，是爲褻也，許意如是，……，玉藻、中庸作綱，禮經作**綱**，皆假借字也」。衛風・碩人、鄭風・丰に「衣錦褻衣」(箋はいずれも「褻，禪也」。玉藻に「禪爲綱」(釋文「爲綱，苦迺反，徐又音迺」)，『儀禮』士昏禮に「**綱**笄被**綱**黼」(注「**綱**，禪也」釋文「**綱**，苦迺反，劉音古熒反，禪也」)。

110) 四篇下 38b 肉部「**散**，裸肉也」(二徐は「裸」を「雜」に作る) 段注に「從**散**者會意也，**散**，分離也，引伸凡**散**皆作**散**。散行而**散**廢矣」。

111) 七篇下 2b 衮部「**散** (**散**)」説解。段注に「**散**澗字以爲聲，散行而**散**廢矣」。

112) 十一篇下 6a 糸部「**斥**」説解。下文に「从反永」，段注に「流別者一水岐分之謂，……，流別則其勢必**褻**行，故曰**褻**流別，斥與水部派音義皆同，派蓋後出耳，**褻**流別，則正流之長者較短而至理同也，故其字从反永」。

113) 十一篇上二 15b 水部「**派**」説解。

114) 十一篇下 6a 糸部「**脈**，血理分**褻**行體中者」。「**脈**」に同じ。

115) 去十五卦・派 (匹卦切) 小韻「**緝**，未緝麻也，說文曰，散絲也」。

116) 十三篇上 4b 糸部「**類**，絲節也」，音は「盧對切」。

給，相ひ足す也，糸に从ふ，合の聲，

（一）足は人の下に居る。人必ず足有りて而る後に體全し。故に引申して完足と爲す。「相ひ足す」なる者は，彼足らざれば此れ之を足す也。故に「合」に从ふ。

（二）形聲にして亦た會意也。居立の切，七部。

緝，止也<sup>(一)</sup>，从糸林聲，讀若柳<sup>(二)</sup>，

緝，止むる也，糸に从ふ，林の聲，讀みて柳<sup>チン</sup>の若くす，

（一）蓋し古へは「緝」を以て禁<sup>117)</sup>字と爲す。釋詁<sup>118)</sup>に曰く「緝は善也」。<sup>119)</sup>

（二）丑林の切，七部。

鞮，止也<sup>(一)</sup>，从糸畢聲<sup>(二)</sup>，

鞮，止也，糸に从ふ，畢の聲，

（一）考工記玉人に曰く「天子の圭は中必ず」，注に曰く「必は讀みて鹿車の鞮<sup>ヒツ</sup>の鞮の如くす，組を以て其の中央を約するを謂ふ，之を執り以て失隊に備ふるが爲なり」と。<sup>120)</sup>按ずるに「鹿車」は即ち「鞮車」。「東齊海岱の間は之を道軌と謂ふ」。<sup>121)</sup>『廣雅』に曰く「道軌は之を鹿車と謂ふ」<sup>122)</sup>。「鹿車下の鉄，陳宋淮楚の間は之を畢と謂ふ」。<sup>123)</sup>所謂る「鹿車の鞮」也。「組を用て圭の中央を約する」と皆な止むる所以の者。又た革部「鞮」<sup>124)</sup>下に詳かなり。

（二）卑吉の切，十二部。

綌，綌絲也<sup>(一)</sup>，从糸冬聲<sup>(二)</sup>，夨，古文終<sup>(三)</sup>，

終，綌絲也，糸に从ふ，冬の聲，夨，古文的終，

（一）按ずるに「綌」字は恐らく誤れり。疑ふらくは下文「纁」字の譌りならん。其の相ひ屬

117) 一篇上 17a 示部「禁，吉凶之忌也」。

118) 『爾雅』釋詁上。

119) 『廣雅』釋詁三「禦、禁、……、緝、……、止也」『疏證』に「緝之言禁也，說文緝，止也，止有安善之意，故字之訓爲止者亦訓爲善，……」。

120) 釋文に「中必，府結反，戚如字」「鹿車鞮，劉府結反，沈音畢，云，劉音非也，案北俗今猶有此語，音如劉音，蓋古語乎，劉音未失」。ルビは，戚説、沈説に據る。

121) 『方言』5。上文に「鞮車，趙魏之間謂之輕鞮車」。

122) 『廣雅』釋器

123) 『方言』9。今本は「鹿」字無く，郭注に「鹿車也」。「箋疏」に「鉄，舊本作鐵，按屬鐵字作鉄，傳寫者遂改作鐵，……，玉篇云，鉄，索也，古作鉄，據此鉄乃本字，鉄其假借字也，……」。

124) 三篇下 4b 革部「鞮，車束也」。「鞮」字段注も『周禮』考工記玉人、『方言』『廣雅』を引き、「糸部鞮，止也，古畢必通用，故必、鞮、鞮同，約圭與約車相類也」という。

くにとる也。『廣韻』に云ふ「終は極也，窮也，竟也」と。<sup>125)</sup> 其の義皆な當に「冬」に作るべし。「冬」なる者は「四時の盡也」。<sup>126)</sup> 故に其の引申の義此くの如し。俗に分別して「冬」を「四時の盡」と爲し、「終」を「極也，窮也，竟也」と爲す。乃ち「冬」をして其の引申の義を失はしめ、「終」をして其の本義を失はしむ。「糸」有り而る後に「鼻」、<sup>127)</sup>「冬」有り而る後に「終」有り。此れ造字の先後也。其の音義は則ち先ず「終」の古文有る也。

(二) 職戎の切，九部。

(三) 「糸」有り而して「鼻」、「冬」有り而る後に「終」有り。

10a

纁，合也<sup>(一)</sup>，从糸集<sup>(二)</sup>，讀若捷<sup>(三)</sup>，

纁，合する也，糸集に从ふ，讀みて捷の若くす，

(校) 大徐本，「糸」下に「从」字有り。

(一) 「合」なる者は「口を<sup>あつ(シフ)</sup>入むる也」。<sup>127)</sup> 因りて凡そ<sup>カフ</sup>兩合の併と爲す。衆絲の合するを「纁」と曰ふは，衣部に「五采相ひ合する」を「襍」と曰ふ<sup>128)</sup> が如き也。

(二) 「集」當に「纁」に作るべし。<sup>129)</sup> 會意にして亦た形聲也。

(三) 姊入の切，七部。

紉，纁也<sup>(一)</sup>，从糸丸聲<sup>(二)</sup>，

紉，纁也，糸に从ふ丸聲，

(一) 「纁」なる者は「白く<sup>こま</sup>致かき繪也」。<sup>130)</sup> 「紉」は即ち「纁」也。故に丸に从ひ，其の滑易<sup>131)</sup> なるを言ふ也。商頌の毛傳に曰く「丸丸は易直也」。<sup>132)</sup> 『釋名』に曰く「紉は<sup>クワン クワン</sup>渙也，細澤

125) 『廣韻』上平一東・終(職戎切)小韻。

126) 十一篇下 8a 欠部「冬(衆)，四時盡也，从欠从舟，舟，古文終字，鼻，古文冬，从日」。

127) 五篇下 15b 亼部「合」説解。二徐は「亼」を「合」に作る。

128) 八篇上 62a 「雜，五采相合也，从衣集聲」段注に「此篆蓋本从衣<sup>糶</sup>，故篆者以木移左衣下作<sup>糶</sup>，久之改<sup>糶</sup>爲<sup>糶</sup>，而仍作雜也」。

129) 四篇上 38a 糶部「糶，羣鳥在木上也，从<sup>糶</sup>木，集，糶或省」。

130) 十三篇上 39a 纁部「纁(素)」説解。但し，大徐本は「致」を「緞」に作る。段注に「致者今之緞字，漢人作注不作緞，近人改爲緞，又於糸部增緞篆，皆非也」。「緞」は大徐本には見えるが，段注、王筠『句讀』は載せず，桂馥『義證』、朱駿聲『通訓定聲』も大徐本新附字とみなす。

131) 『周禮』春官・司服「王爲三公六卿錫衰」注に「鄭司農云錫麻之滑易者」，また『儀禮』喪服「傳曰，錫者何也，……」注に「謂之錫者，治其布使之滑易也」，釋文はいずれも「滑易，以鼓反」。

132) 殷武「松栢丸丸」傳。疏に「易直者，言其滑易而調直也」。

にして光の渙渙然たる有る也」と。<sup>133)</sup>

(二) 胡官の切，十四部。「紃」篆舊と「終」篆の前に在り。非也。今『玉篇』に依りて此に次す。「繪」と伍を爲す。『玉篇』必ず許に仍る也。<sup>134)</sup>

繪，帛也<sup>(一)</sup>，从糸曾聲<sup>(二)</sup>，綵，籀文繪，从宰省<sup>(三)</sup>，楊雄曰爲漢律祠宗廟丹書告也<sup>(四)</sup>，

繪，帛也，糸に从ふ，曾の聲，綵，籀文の繪，宰の省に从ふ，楊雄曰て，漢律宗廟を祠り丹書して告ぐと爲す也と，

(校) 大徐，「告」下に「也」字無し。

(一) 七篇「帛」下に「繪也」<sup>135)</sup>と曰ふ。是れ轉注爲り。春秋の傳段りて「鄫」<sup>136)</sup>字と爲す。

(二) 疾陵の切，六部。

(三) 宰の省の聲也。辛の聲と曰はず定めて宰の省の聲と爲す者は，「辛」は「曾」と眞、蒸の別有り，「宰の省」は「曾」と之、蒸の相ひ合し通轉して取も近き者と爲せば也。<sup>137)</sup>

(四) 「也」字『韻會』<sup>138)</sup>に依りて補ふ。「綵」は宗廟を祠り丹書して神に告ぐるの帛爲り。漢律に見ゆる者は字此くの如く作る。楊雄之を言ふ。雄「甘泉賦」に曰く「天<sup>たてまつ</sup>に上るの綵」と，<sup>139)</sup>蓋し即ち郊祀に丹書して神に告ぐる者を謂ふ。此れ則ち「宰」に从ひ省せざる者也。

繹，繪也，从糸胃聲<sup>(一)</sup>，

133) 卷4釋綵帛。『疏證補』は『太平御覽』卷819の引用を根據に「渙」を「煥」に作る。「煥」は大徐本新附字。

134) 大徐本は「紃」「終」「繹」，『大廣益會玉篇』は「繹」「終」「紃」の順に列ぶ。

135) 七篇下57a帛部「帛」説解。

136) 六篇下52b邑部「鄫，姒姓國，在東海」。段注に「按國名之字，左傳作鄫，國語作繪，公羊作鄫，穀梁作繪，左釋文於鄫首見處云，亦作繪，據許則國名從邑也，漢縣名從糸」。穀梁傳は僖公十四年「夏六月，季姬及繪子遇于防，使繪子來朝」十五年「季姬歸于繪」十六年「夏四月丙申，繪季姬卒」十九年「夏六月，……，繪子會盟于邾，己酉，邾人執繪子」宣公十八年「秋七月，邾人戕繪子于繪」，成公二年「十有一月……丙申，公及楚人，……，鄫人，盟于蜀」襄公五年「叔孫豹，繪世子巫如晉」「公會晉侯、宋公，……，吳人，鄫人于戚」六年「莒人滅繪」昭公四年「九月，取繪」哀公七年「夏，公會吳于繪」，すべて「繪」に作るが，左傳、公羊傳は「繪」を「鄫」に作る（公羊傳は「邾」を「邾婁」に作る）。但し，左傳も宣公十八年の傳など傳では「繪」に作る箇所もある。段注にいう「左釋文於鄫首見處」は僖公十四年經「鄫子」下の「似綾反，本或作繪」。

137) 古十七部諧聲表では，辛聲は十二部(眞部)，曾聲は第六部(蒸部)，宰聲は第一部(之部)。『六書音均表』三・弟六部與弟一部同入説に「弟六部與弟一部合用最近」。

138) 平下十蒸・繪(慈陵切)小韻。

139) 揚雄傳上の顔注は「綵，事也，……，綵讀與載同」といい，「綵」を「綵」の或體とはしない。『文選』卷7李善注も「綵，事也，……，毛詩曰，上天之載，無聲無臭，綵與載同」(毛詩は大雅・文王，毛傳に「載，事」)。その他，「綵」の訓は『大廣益會玉篇』糸部は「事也，載也」，『廣雅』釋詁は「事也」とする。なお，「綵」は大徐本の新附字でやはり「事也」と訓じられている。

絹，繪也，糸に从ふ，胃の聲，

(一) 云貴の切，十五部。

紉，綺絲之數也<sup>(一)</sup>，漢律曰，綺絲數謂之**紉**，布謂之**總**<sup>(二)</sup>，綬組謂之首<sup>(三)</sup>，从糸兆聲<sup>(四)</sup>，

**紉**，綺の絲の數也，漢律に曰く，綺の絲の數は之を**紉**と謂ひ，布は之を**總**と謂ひ，綬組は之を首と謂ふと，糸に从ふ，兆の聲，

(一)「綺」を言ひて以て凡そ繪を見ず也。「綺」なる者は「あやぎぬ文繪也」。140) 文繪の絲尙ほ數有れば，則ち餘繪は知る可し。其の若干絲を一**紉**と爲すは未だ聞かず。

(二) 禮經は布八十縷を「升」と爲す。141) 禾部に曰く「布八十縷を稷と爲す」と。142) 『漢』王莽傳に「一月の祿は十縷の布二匹」，孟康曰く「縷は八十縷也」と。143) 今按ずるに「ソウ總」は即ち「ソウ稷」也。「ソウ稷」は即ち「ソウ縷」也。「ソウ縷」は即ち「ソウ升」也。皆な八十縷を謂ふ。召南羔羊「五總」，傳に曰く「總は數也」と。144)

(三) 司馬紹統 輿服志に「乘輿は黃赤綬，五百首，諸侯王は赤綬，三百首，相國は綠綬，二百四十首，公、侯、將軍は紫綬，百八十首，九卿、中二千石、二千石は青綬，百二十首，千石、六百石は黑綬，八十首，四百石、三百石、二百石は黃綬，六十首，凡そ先ず單紡を合せて一系と爲し，四系を一扶と爲し，五扶を一首と爲し，五首を一文と爲し，文の采の淳なるを一圭と爲す。首多き者は系ほそ細く，首少き者は系ふと麤し」と。145)

(四) 治小の切，二部。

10b

綺，文繪也<sup>(一)</sup>，从糸奇聲<sup>(二)</sup>，

あやぎぬ綺，文繪也，糸に从ふ，奇の聲，

(一) 繪の文有る者を謂ふ也。「文」なる者は「錯畫也」<sup>146)</sup>。「錯畫」は其の介畫を**造**造するを謂ふ。

140) 下篆説解。

141) 『儀禮』喪服・斬衰三年「冠六升」注に「布八十縷爲升，升字當爲登，登，成也，今之禮皆以登爲升，俗誤已行久矣」疏に「云布八十縷爲升者，此無正文師師相傳言之，是以今亦云，八十縷謂之宗，宗即古之升也」。

142) 七篇上 52b 禾部「稷，布之八十縷爲稷」段注は『漢書』注、『儀禮』喪服注疏を引き，「是則宗、縷、登、升一語之轉，聘禮今文作稷，古文作縷，許从今文，故糸部無縷，布縷與禾把皆數也，故同名」。

143) 王莽傳中。顏注「稷音子公反」。注の「縷」を「縷」に作るテキスト有り。中華書局本校記に「景祐、殿、局本都作縷」。

144) 「羔羊之縫，素絲五總」。釋文「五總，子公反」。

145) 『後漢書』輿服志下。一部省略あり。また，今本(中華書局本)は「五首爲一文」の「爲」を「成」に作り，「少」上に「首」字が無い。

146) 九篇上 20b 文部「文」の説解。

繪 造する方文を爲せば、之を文綺と謂ふ。之を引申して「交疢結綺の窗」<sup>147)</sup>と曰ひ「疆場綺分たり」<sup>148)</sup>と曰ふ。皆な綺文の似きを謂ふ。

(二) 祛彼の切、古音は十七部に在り。<sup>149)</sup>

繫、細縛也<sup>(一)</sup>、从糸設聲<sup>(二)</sup>、

設、細かき縛也、糸に従ふ、設の聲、

(一) 縛の細き者也。『詩』<sup>150)</sup>「玼<sup>151)</sup>たり玼たり、其れ之れ展也、彼の縹綺を蒙ふ、是れ繼袷也、傳に曰く「禮に展衣有る者は、丹穀を以て衣と爲す、蒙は覆也、綺の靡なる者を縹と爲す<sup>152)</sup>」と。「靡」は<sup>ヒ</sup>縹碎<sup>153)</sup>の如く然るを謂ふ、細の至れる也。箋に「縹綺は綺の蹙蹙<sup>154)</sup>たる者」と云ふ

147) 『文選』卷29 古詩十九首 其五。李善注「說文曰、綺、文繪也、此刻鏤以象之」。今本は「疢」を「疏」に作る。二篇下32a 疢部「疢、通也」段注に「此與疢部疏音義皆同」、また十四篇下28a 疢部「疏、通也」段注に「疢部曰、疢、通也、疏與疢音義皆同、皆从疢者、疢所以通也、鄭注月令明堂位、薛解西京賦、張注靈光殿賦皆訓疏爲刻鏤、古疢、疏、疢三字通用矣」。

148) 『文選』卷1 班固・西都賦。五臣は「分」を「紛」に作る。張銑注に「疆場、畔也、……、綺紛、刻鏤龍鱗、皆地之畦疆相交錯成文章」。

149) 祛彼切（紙韻）は今韻古分十七部表では十六部、奇聲は古十七部諧聲表では十七部。

150) 鄘風・君子偕老。

151) 阮元本は「玼」を「瑳」に作る（二章は「玼」に作り、三章は「瑳」に作る）。『毛詩故訓傳定本小箋』卷4 はいずれも「玼」に作り、三章「玼」下に「玼字一作瑳、淺人乃以分別二三章」という。釋文に「玼、音此、又且禮反、鮮盛貌、說文云新色鮮也、字林云鮮也、音同、玉篇且禮反、云鮮明貌、沈云、毛及呂忱並作玼解、王肅云、顔色衣服鮮明貌、本或作瑳、此是後文瑳兮王肅注、好美衣服潔白之貌、若與此同、不容重出、今檢王肅本後不釋、不如沈所言也、然舊本皆前作玼、後作瑳字、「瑳兮、七我反、說文云玉色鮮白」。また、後出の『周禮』天官・內司服の注引く君子偕老の「玼」の釋文に「音此、劉倉我反、本亦作瑳、與下瑳字同、倉我反」とある。阮元校勘記は『毛詩故訓傳定本小箋』や鄘風、內司服の釋文を引き、「此玼瑳一字之證」としている。なお、一篇上29a 玉部「玼、新玉色鮮也、从此玉聲」（二徐「新」字無し）段注に「玼之或體作瑳、……、詩君子偕老二章三章皆曰玼兮玼兮、是以二章毛、鄭有注、三章無注、或兩章皆作瑳、……、自淺人分別玼屬二章、瑳屬三章、畫爲二字二義、又於說文增瑳爲訓釋、今刪」といい、段注本は二徐では「玼」の前にある「瑳」篆を刪る。

152) 十三篇上34b 糸部に「縹、細葛也」「縹、縹之細者也、詩曰、蒙彼縹綺。庸風君子偕老文、一曰戚也」（二徐「者」字無く、「戚」を「蹙」に作る）。「縹」字段注は、毛傳の「靡」について「按靡謂紋細兒、如水紋之靡靡也、米部曰、縹、碎也、凡言靡麗者皆取縹義、謂其極細、此毛說與鄭說之不同也」といい、「戚」について「戚各本作蹙、蹙者蹙也、非其義、蓋本作戚、俗作蹙、又改爲蹙耳、今正、鄭箋云、縹綺、縹之蹙蹙者、此鄭說之異毛也、戚戚者如今皺紗然」という。

153) 七篇上64b 米部「縹、碎也」段注に「石部云、碎、縹也、二字互訓、……、廣雅廢字二見。曰廢、籩也、與說文同。曰廢、糲也、即說文之縹碎也。廢與縹音同義少別、凡言粉碎之義當作縹、また九篇下30b 石部に「碎、縹也」（二徐は「縹」を「確」に作る）段注に「確所以碎物而非碎也、今正、米部曰、縹、碎也、二篆爲轉注、……、碎者破也、縹者破之甚也、義少別而可互訓」。

154) 注152)引く「縹」字段注参照。また、小雅・節南山「蹙蹙靡所騁」箋に「蹙蹙、縮小之貌」、また『爾雅』釋訓に「速速、蹙蹙、惟速鞠也」注に「陋人專祿國侵削、賢士永哀念窮迫」。十二篇下42a 戍部「戚、戍也」段注に「戚之引伸之義爲促迫、而古書用戚者、俗多改爲蹙」。「蹙」は大徐新附字。

は是れ也。此れ裏衣は縹緜, 外服は丹縠衣を謂ふ。「縠」は「縹緜」と正しく一類也。今の「縹緜」は古の「縠」也。『周禮』之を「沙」と謂ひ, 注之を「沙縠」と謂ひ,<sup>155)</sup> 疏「輕き者を沙と爲し, 縹者を縠と爲す」と云ふ。<sup>156)</sup> 按ずるに古へ祇だ「沙」に作り, 「紗」字無し。

(二) 胡谷の切, 三部。

11a

縹, 白鮮<sup>𦉳</sup>也<sup>(一)</sup>, 从糸專聲<sup>(二)</sup>,

縹, 白鮮<sup>𦉳</sup>也, 糸に从ふ, 專の聲,

(校)「𦉳」, 大徐本「色」に作る。

(一)「𦉳」, 各本「色」に作る。今正す。下文に「縹は鮮<sup>𦉳</sup>也」<sup>157)</sup>と云ふ。今本「鮮色」に譌る。則ち此の「色」の誤り亦た同じ。「𦉳」は「支」と音同じ。<sup>158)</sup>「縹」は鮮支と爲し, 「縹」は鮮支の白き者と爲す。聘禮「束紡」注に曰く「紡は絲を紡ぎて之を爲る, 今の縹也」と。<sup>159)</sup>『周禮』「素沙」注に曰く「素沙なる者は今の白縹也」と。<sup>160)</sup>釋文皆な『說文』を引き, 「居掾の反, 聲類以て今の正絹の字と爲す」と。<sup>161)</sup>按ずるに許に據れば則ち「縹」は「絹」<sup>162)</sup>と各物, 音近くして義殊れり。二禮の鄭注 自ら縹を謂ひ絹を謂はざる也。「縹」は其の質堅なるを以て之に名づけ, 字「專」に从ふ。「絹」は色麥<sup>縹</sup>の如きを以て之に名づけ, 字「育」に从ふ。李登『聲類』を作る時已に其の傳を失す。羽人「十搏を縹と爲す」<sup>163)</sup>、『左傳』「一に縹すること瑱の如し」<sup>164)</sup>

155) 天官・内司服「掌王后之六服, 袴衣, 揄狄, 闕狄, 鞠衣, 展衣, 緣衣, 素沙」注「素沙者今之白縹也, 六服皆袍制, 以白縹爲裏, 使之張顯, 今世有沙縠者, 名出于此」。

156) 内司服の疏にこの文は無い。『漢書』江充傳「紗縠禪衣」顏注に「紗縠, 紡絲而織之也, 輕者爲紗, 縹者爲縠」。『漢書』は「沙」を「紗」に作る。

157) 十三篇上 11b 糸部。但し, 大徐本は「𦉳」を「色」に作る。

158) 九篇上 30b 𦉳部「𦉳」、三篇下 21a 支部「支」いずれも「章移切, 十六部」。また、『史記』貨殖列傳「若千畝𦉳茜」集解引く徐廣說、索隱いずれも「𦉳音支, 鮮支也」。「𦉳」「𦉳」は「𦉳」の異體字、俗字。

159) 「賓謁, 迎大夫賄, 用束紡」注。釋文に「之縹, 劉音須, 一本作縹, 息絹反, 案說文白鮮色也, 居掾反, 聲類以爲今正絹字」。

160) 注 155) 引く内司服注の釋文に「白縹, 劉音絹, 聲類以爲今作絹字, 說文云, 鮮色也, 居掾反, 徐升卷反, 沈升絹反」。

161) 段注の引用は『儀禮』の釋文と一致するが, 居掾反、居援反はいずれも線韻。

162) 十三篇上 13b 糸部「絹, 繪如麥<sup>縹</sup>色」(大徐本は「色」字無し)。p.114 参照。

163) 『周禮』地官・羽人「凡受羽, 十羽爲審, 百羽爲搏, 十搏爲縹」注に「審、搏、縹, 羽數東名也, 爾雅曰, 一羽謂之箴, 十羽謂之縹, 百羽謂之縹, 其名音相近也, 一羽有名, 蓋失之矣」, 釋文に「爲搏, 除轉反, 注同, 劉徒端反」「爲縹, 劉古本反, 沈除轉反」「之縹, 古本反, 劉音渾, 一音戶本反, 李又基遠反」。『周禮漢讀考』卷 2 羽人では「音相近者, 箴與審、縹與搏、縹與縹, 皆相近也, 惟一羽有名, 不如周禮說長」という。

164) 昭公二十六年傳。阮元本は傳の「縹」を「縹」に作る。注は「縹」に作る。校勘記に「石經、宋本、淳熙本、岳本、閩本、監本, 縹作縹, 與釋文合」注に「瑱, 充耳, 縹, 卷也, 急卷使如充耳, 易懷藏」。釋文「縹, 直轉反, 卷也」。

の若きは又た皆な卷縛<sup>165)</sup>の義，字の本義に非ず。

(二) 持沈の切，十四部。

縑，并絲繪也<sup>(一)</sup>，从糸兼聲<sup>(二)</sup>，

縑，絲を并ぶる繪也，糸に从ふ，兼の聲，

(一) 絲を駢べて之を爲るを謂ふ。雙絲の繪也。『呂氏春秋』に「昔吾が亡<sup>うしな</sup>ふ所の者は紡縑也，今子の衣は禪縑也，禪縑を以て紡縑に當つれば，子豈に得ざること有らん哉」<sup>166)</sup>，任氏大椿曰く「禪縑は即ち單縑也」<sup>167)</sup>と。余謂らく，此の「紡」は即ち「方」也。竝<sup>なら</sup>ぶ絲を「方」と曰ふは，猶ほ「併<sup>なら</sup>ぶ船」<sup>168)</sup>を「方」と曰ふがごとし。此の「紡」は「紡」の本義に非ず。『後漢』輿服志<sup>169)</sup>及び古今注<sup>170)</sup>竝びに「單紡を合せて一系と爲す」と云ふ者は同じ。<sup>171)</sup>此の「方絲」は所謂る「兼絲」也。

(二) 形聲中に會意有り。古甜の切，七部。

11b

縑，厚<sup>厚</sup>繪也<sup>(一)</sup>，从糸弟聲<sup>(二)</sup>，

縑，<sup>おつ</sup>厚<sup>厚</sup>き繪也，糸に从ふ，弟の聲，

(校)「厚」，大徐本「厚」に作る

(一)「厚」各本「厚」に作る。今正す。<sup>172)</sup>『管子』輕重戊篇に，管子桓公に對へて「魯梁の民俗 縑を爲る，公縑を服せよ」，既に又た桓公に對へて「宜しく帛を服し縑を去るべし」<sup>173)</sup>と。然らば則ち帛薄く縑厚きは知る可き也。『史記』范雎傳索隱に曰く「蓋し今の縑」と。<sup>174)</sup>按ずるに非也。「縑」は即ち許の「縑」<sup>175)</sup>字。

165) 十三篇上 9a に「縛，束也」。p.99 参照。

166) 審應覽・淫辭。『呂氏春秋』今本には「有」字が無い。下注の任大椿『釋繪』の引用する『呂氏春秋』には「有」が有る。段玉裁は、『釋繪』引く所に據るか。

167) 『釋繪』一曰紡に「後漢書輿服志及古今註並云，合單紡爲一系，紡與單相對，則紡非單絲可知，呂氏春秋，昔……，子豈有不得哉，考禪縑即單縑也，單縑與紡縑對，則紡不單矣」。

168) 八篇下 6b 方部「方」説解。

169) 輿服志下。「縑」字段注 (p.104) 参照。

170) 卷上・輿服。

171) 『釋繪』に據るか。

172) 五篇下 29b 厚部に「厚，厚也」「厚，山陵之厚也」。「厚」字段注に「厚當作管，上文曰，管，厚也，此曰厚，篤也，是爲轉注，今字厚行而厚廢矣，凡經典厚薄字皆作厚」。

173) 今本『管子』は「服帛」下「去縑」上に「率民」二字有り。

174) 「乃取其一縑袍以賜之」索隱に「按，縑，厚繪也，音啼，蓋今之縑也」。

175) 十三篇上 11b 「縑」字段注 (次頁) 参照。

(二) 杜兮の切，十五部。

縑，凍繪也<sup>(一)</sup>，从糸東聲<sup>(二)</sup>，

練，繪を凍る也，糸に从ふ，東の聲，

(一)「凍<sup>レン</sup>」なる者は「澗也」<sup>176)</sup>。「澗」なる者は「浙也」<sup>177)</sup>。「浙」なる者は「米を汰ふ也」<sup>178)</sup>。「繪を凍る」はこれを水中に汰ふこと，米を汰ふが如く然り。考工記に所謂る「帛を凍る」<sup>179)</sup>也。已に凍るの帛を「練」と曰ふ。引申して精簡の稱と爲す。『漢書』「時日を練る」<sup>180)</sup>、「章程を練る」<sup>181)</sup>の如きは是れ也。

(二) 郎甸の切，十四部。

縞，鮮𦘔也<sup>(一)</sup>，从糸高聲<sup>(二)</sup>，

縞，鮮𦘔也，糸に从ふ，高の聲，

(校)「𦘔」，大徐本「色」に作る。

(一) 各本「鮮色」に作る。今正す。『漢』地理志師古注に「縞、鮮支也」。<sup>182)</sup> 司馬相如傳正しく同じ。<sup>183)</sup> 顔の語多く『説文』に本づく。彼の時未だ誤らず。蓋し「支」亦た「𦘔」に作る。<sup>184)</sup> 因りて「色」に譌る也。『廣雅』に「縞、總、鮮支、縠は絹也」。<sup>185)</sup> 許謂らく「縞」は即ち「鮮支」と。鄭風に「縞衣綦巾」，毛曰く「縞衣は白色の男服也」と。<sup>186)</sup> 王逸曰く「縞は素也」と。<sup>187)</sup> 任氏大椿『釋繪』に曰く「孰帛を練と曰ひ，生帛を縞と曰ふ」と。

(二) 古老の切，二部。

176) 十一篇上二 41a 水部「凍」説解。段注「周禮染人，凡染，春暴練，注云，暴練，練其素而暴之，按此練當作凍，凍其素，素者質也，即𦘔氏之凍絲，練帛也，已凍之帛曰練，糸部練下云凍繪也，是也，𦘔氏如法凍之，暴之，而後絲帛之質精，而後染人可加染，凍之以去其瑕，如澗米之去康粲，其用一也，故許以澗釋凍，……，許不以凍澗二篆爲伍者，澗謂米，凍謂絲帛也，金部冶金曰鍊，猶治絲帛曰凍」。

177) 十一篇上二 32a 水部「澗」説解。

178) 十一篇上二 32a 水部「浙」説解。

179) 『周禮』考工記・𦘔氏「凍絲，……，凍帛以欄爲灰，……」。釋文に「凍絲，音練，下同」。

180) 禮樂志・郊祀歌。顔注は「練，選也」。

181) 『漢書』には用例は見えない。時代が下がって『明史』卷 149 に「誦練章程」という例が見えるが、「誦練」の「練」は精簡より熟練、熟知の意味に近いように思われる。

182) 地理志上「𦘔斐玄織縞」顔注に「縞，鮮支也，即今所謂素者也」。

183) 子虛賦「揄紵縞」顔注に「縞，鮮支也，今之所謂素者也」。

184) 注 158) 引く『史記』貨殖列傳及び集解、索隱參照。

185) 釋器。原文は「總」を「縵」に作る。十三篇上 16a「縵，帛青色也」段注に「廣雅，絹一名縵，作縵者誤」。

186) 出其東門。

187) 未詳。『楚辭』招魂「纂組綺縞」洪興祖『補注』に「縞，音杲，素也」。洪興祖『補注』の誤りか。

縵，粗緒也<sup>(一)</sup>，从糸璽聲<sup>(二)</sup>，

縵，粗なる緒也，糸に从ふ，璽の聲，

(一)「粗」なる者は「疏也」<sup>188)</sup>。「粗なる緒」は蓋し亦た縵の名。『廣韻』に云ふ「縵，布の似し」，俗に「縵」に作ると。<sup>189)</sup>玉裁按ずるに蓋し今の綿紬なり。

(二)式支の切，十六部。

紬，大絲繪也<sup>(一)</sup>，从糸由聲<sup>(二)</sup>，

紬，<sup>ひと</sup>大き絲の繪也，糸に从ふ，由の聲，

(一)「大絲」は常の絲に較べて大と爲す也。『左傳』衛文公「大帛之冠」<sup>190)</sup>，「大帛」は大き絲の繪を謂ふ。『後漢書』「大練」<sup>191)</sup>亦た大き絲の練を謂ふ也。『獨斷』「飛輪」を説きて「緹紬を以てす，廣さ八尺，長さ地に拄く」と。<sup>192)</sup>今 繪帛通じて呼びて紬と爲す。大き絲を必せざる也。段借して抽字と爲す。『史記』「石室金匱の書を紬く」，徐廣「音抽」<sup>193)</sup>，師古『漢書』「音胄」<sup>194)</sup>，皆な是れ也。「音胄」は「籀」<sup>チウ</sup>に同じきを謂ふ也。<sup>195)</sup>「籀」なる者は「書を読む也」。<sup>196)</sup>『釋名』に曰く「紬は抽也，抽は絲の端を引きて細き緒を出す也」と。<sup>197)</sup>許説と廻かに異れり。

(二)直由の切，三部。

12a

縿，致繪也<sup>(一)</sup>，一曰微識信也，有齒<sup>(二)</sup>，从糸敝省聲<sup>(三)</sup>，

縿，<sup>こまか</sup>致き繪也，一に曰く，微識の信也，齒有り，糸に从ふ，敝の省の聲，

(校)「致」，大徐本「緻」に作り，小徐「緻」に作る。「識」，二徐「幟」に作る。「敝省」，二徐「改」に作る。

188) 七篇上 60a 糸部「粗」説解。

189) 上平五支・縵(式支切)小韻「縵，繪似布，……，縵，俗」。

190) 閔公二年傳。注に「大帛，厚繪」。

191) 皇后紀・明德馬皇后「常衣大練，裙不加緣」注に「大練，大帛也」。

192) 『獨斷』今本(漢魏叢書本、百子全書本、四部叢刊本、『北堂書鈔』『說郛』等)は「紬」を「油」、「尺」を「寸」、「拄」を「注」に作る。しかし、『文選』卷3張衡東京賦「疏黻飛輪」薛綜注引く「蔡邕獨斷」は段注の引用に同じ。十四篇上車部「輪」段注も東京賦の薛綜注を引くが、「紬」下に「一作油」、「尺」下に「當作寸」と注あり。

193) 太史公自序。原文は「紬」下に「史記」二字有り。徐廣音は集解、索隱引く所。

194) 司馬遷傳「紬史記石室金匱之書」注。

195) 本來、「紬」は平聲(尤母)。去聲(宥母)に讀むと「籀」と同音になる。『漢書』藝文志・六藝略・小学「史籀十五篇」顏注に「籀音胄」。

196) 五篇上 3b 竹部「籀」説解。段注に「亦假紬字爲之，大史公自序，紬史記石室金匱之書，……」。

197) 釋采帛。

(一)「致は送り詣る也」。<sup>198)</sup>凡そ細膩を致と曰ふ。今の「緻」字也。漢人多く「致」を用ひて「緻」に作らず。<sup>199)</sup>「致き繪」を「綦」と曰ふは、未だ其の證を聞かず。

(二)各本「識」を「幟」<sup>200)</sup>に作る。俗字也。今正す。巾部に曰く、「微」なる者は「微識也」<sup>201)</sup>と。「微識の信」は蓋し綦鞞を謂ふ。「綦」<sup>202)</sup>「綦」通用する也。『漢』匈奴傳に曰く「綦鞞十」,師古曰く「綦鞞は衣有るの鞞也」<sup>203)</sup>、「赤黒の繪を以て之を爲る」<sup>204)</sup>と。『古今注』に曰く「綦鞞は受の遺象」「木を以て之を爲る。後世 <sup>ますます</sup> 滋 偽り, 典刑に復する無し。赤紬を以て之を韜む。亦た之を紬鞞と謂ひ, 亦た之を綦鞞と謂ふ。王公以下通じて之を用ひて以て前驅す」。<sup>205)</sup>按ずるに赤黒の繪を用ふ, 故に「綦」と曰ふ。其の用は微識に同じ, 故に「微識の信」と曰ふ。

(三)各本「𦏧の聲」に作る。「𦏧」字を成さず。按ずるに木部「綦」下に「𦏧の省の聲」と曰ふ。<sup>206)</sup>則ち此れ亦た當に「𦏧の省の聲」と云ふべし。今『韻會』<sup>207)</sup>に依りて正す。康禮の切, 十五部。

綦, 東齊謂布帛之細者曰綦<sup>(一)</sup>, 从糸夔聲<sup>(二)</sup>,

綦, 東齊は布帛の細き者を謂ひて綦と曰ふ, 糸に从ふ, 夔の聲,

(一)『方言』に同じ。<sup>208)</sup>

(二)力膺の切, 六部。

縵, 繪無文也<sup>(一)</sup>, 从糸曼聲<sup>(二)</sup>, 賜衣者縵表白裏,

縵, 繪の文無き也, 糸に从ふ, 曼の聲, 漢律に曰く, 賜衣は縵表白裏と,

(一)『春秋經傳』に「庶人縵を衣る」と。<sup>209)</sup>之を引申して凡そ文無きを皆な縵と曰ふ。『左傳』

198) 五篇下 35b 夔部「致」説解。段注に「送詣者, 送而必至其処也, 引伸爲召致之致, 又爲精致之致」。

199) 注 130) 参照。

200) 「幟」は大徐新附字。

201) 七篇下 49a 「微」説解。但し, 二徐は「幟也」。

202) 六篇上 56a 木部「綦, 傳信也, 從木, 啓省聲」。

203) 今本は「鞞」に作る。注下文に「綦, 音𦏧」。十二篇下 (36a) 戈部「鞞」の篆は「鞞」に作るが, 段注注文は「鞞」に作る。

204) 韓延壽傳「建幢綦」顔注に「綦, 有衣之鞞也, 其衣以赤黒繪爲之, …… , 綦音𦏧」。

205) 卷上・輿服。「紬」, 百子叢書本、四部叢刊本、『後漢書』杜詩傳注引、『佩文韻府』(下平聲四豪韻三・韜・赤油韜) 引, 「油」に作る。「王公」, 百子叢書本「公王」に作る。『段注攷正』に「古今注上輿服篇, 兩紬字皆作油 (御覽六百八十一引同), 王公作公王, 段所見不知何本」。管見の限りでは「紬」に作るテキストはない。

206) 注 202) 参照。

207) 上八齊・啓 (遣禮切) 小韻「綦」下引く『説文』は「𦏧省聲」に作る。

208) 卷 2。『方言』は「謂」を「言」に作る。

209) 度制。

「縵に乗る」注に「車の文無き者也」<sup>210)</sup>、『漢』食貨志「縵田」注に「<sup>うね</sup>繡せざる者を謂ふ也」<sup>211)</sup>と。

(二) 莫半の切，十四部。

12b

繡，五采備也<sup>(一)</sup>，从糸肅聲<sup>(二)</sup>，

繡，五采備也，糸に从ふ，肅の聲，

(一) 考工記に「畫繪の事，五采を<sup>まじ</sup>襍ふ」「五采備はるは，之を繡と謂ふ」と。<sup>212)</sup>鄭氏，古文尚書に曰く「予古人の日、月、星辰、山、龍、華蟲に象りて績を作し，宗彝、藻火、粉米、黼黻を希繡するを觀んと欲す」<sup>213)</sup>，「此れ古への天子の冕服十二章」，「希は讀みて<sup>ち</sup>黼<sup>214)</sup>と爲す，或いは<sup>ち</sup>緝<sup>215)</sup>に作るは字の誤り也」<sup>216)</sup>と。按ずるに今人鍼縷を以て<sup>はりいと</sup>緝<sup>ふ</sup>所<sup>217)</sup>の者は之を「繡」と謂ひ，「畫」と二事爲り。考工記の如きは則ち「繡」も亦た之を「畫繪」に糸く。同じく「色を設くるの工」<sup>218)</sup>爲れば也。畫繪は文字と又た一事爲り。故に許「古人の象を觀る」を以て「舊文を遵修す」を説く也。<sup>219)</sup>

(二) 息救の切，三部。

210) 成公五年傳。杜注「車無文」。「者也」二字無し。

211) 食貨志上「一歲之收常過縵田<sup>晦</sup>一斛以上」顏注「縵田，謂不爲<sup>(晦)</sup>〔唼〕者也，縵音莫幹反」。中華書局本校勘記に「景祐、殿本都作「唼」。王先謙說作「唼」是」。『補注』は「<sup>晦</sup>」に作るが、「先謙曰、官本爲<sup>晦</sup>作爲唼，是」。原文は「不」下に「爲」字有り。

212) 畫績。阮元本は「繪」を「績」に作り，「襍五采」を「雜五色」に作る。十三篇上4a

糸部「績，織餘也，一曰畫也」(大徐本「一曰畫也」無し)段注に引く所は「績」に作り，「讀曰猶讀爲，易其字也，以爲訓畫之字當作績也(讀曰は猶ほ讀爲のごとし，其の字を易ふる也，以爲く，畫に訓ずるの字は當に績に作るべき也と)(前號の訓讀を訂正)」という。「繪，會五采繡也」(13a)段注にも「古者，績訓畫，繪訓繡」。

213) 阮元本『尚書』益稷は「績」を「會」、「希」を「緝」に作る。この引用は『周禮』春官・司服「王之吉服，……，玄冕」注に「玄謂，書曰」として引かれるテキストに同じ。なお、『古文尚書撰異』卷2 阜陶謨は「績」を「繪」に作り，「希」については「僞孔本作緝，今從鄭」という。

214) 七篇下58b 黼部「黼，箴縷所<sup>緝</sup>衣也」段注に「箴當作鍼，箴所以綴衣，鍼所以縫也，<sup>緝</sup>，縫也，縷，綫也，絲亦可爲綫矣，以鍼貫縷<sup>緝</sup>衣曰黼，……，阜陶謨曰，緝繡，鄭本作希，注曰，希讀爲黼，黼，<sup>緝</sup>也，周禮司服希冕，鄭注引書希繡，又云，希讀爲黼，或作緝，字之誤也，今本周禮注疏傳寫倒亂，今俗語云鍼黼是此字，按許多云希聲而無希篆，疑希者古文黼也，从中，上象繡形」。

215) 十三篇上34b 糸部「緝，細葛也」。

216) 『周禮』春官・司服「王之吉服，……，玄冕」鄭注。阮元本は「黼」を「緝」、「緝」を「黼」に作る。段玉裁がテキストを改める根據については「黼」字注(注214)参照。

217) 「黼」字說解(注214)参照。

218) 考工記・總敘「設色之工五，……，設色之工，畫、績、鍾、筐、<sup>幌</sup>」。

219) 『說文解字』十五篇上後敘に「書曰，予欲觀古人之象，言必遵修舊文而不穿鑿」。

紉，詩云，繫目爲紉兮<sup>(一)</sup>，从糸句聲<sup>(二)</sup>，

紉，詩に云く，繫目て紉を爲すと，糸に従ふ，句の聲，

(一) 逸詩。『論語』八佾篇に見ゆ。馬融曰く「紉は文の貌也」と。<sup>220)</sup> 鄭康成『禮』注に曰く「采文を成すを紉と曰ふ」<sup>221)</sup>、『論語』に注して曰く「文章を成すを紉と曰ふ」。<sup>222)</sup> 此の篆を「繡」「繪」の間に次する者は，亦た五采文章を成すを謂ふ。鄭の義と略ほ同じき也。鄭「繪の事は素を後にす」に注して云く「畫繪は先ず衆采を布き，然る後に素を以て其の間を分ち，以て其の文を成す」と。<sup>223)</sup> 朱子則ち云く「後素は素より<sup>おく</sup>後るる也，先ず以地に粉するを以て質と爲し而る後に五采を施すを謂ふ」と。<sup>224)</sup> 許に據れば「紉」は「繡」「繪」の間に在り。「繡」「繪」皆な五采也。蓋し許白を用て采の旨を受くるか。

(二) 許掾の切，古音は十二部に在り。<sup>225)</sup> 按ずるに唐玄度『九經字樣』「縞」「紉」同字，注に云く「上，說文，笱の聲に従ふ，下，經典相ひ承く，隸省」と。<sup>226)</sup> 按ずるに「縞」は他書に見えず。疑ふらくは唐氏據る所未だ確たらざる也。惟ふに『儀禮』注に云く，「紉」，今文は「紉に作る」と。<sup>227)</sup> 然らば則ち「紉」は禮の古文に出づ。許は禮の古文を用ふ。故に禮の今文を録さず。『玉篇』「紉」は上「紉」に同じ。<sup>228)</sup> 禮注に本づく也。『集韻』「縞」「紉」に同じ。<sup>229)</sup> 此れ唐氏に本づく也。

### 13a

繪，會五采繡也<sup>(一)</sup>，虞書曰，山、龍、**蕞**蟲作繪<sup>(二)</sup>，論語曰，繪事後**繫**<sup>(三)</sup>，从糸會聲<sup>(四)</sup>，

繪，五采を會する繡也，虞書に曰く，山、龍、**蕞**蟲 繪を爲す，論語に曰く，繪の事は**繫**を後にすと，糸に従ふ，會の聲

(一) 「會」「繪」疊韻なり。今人 咎繇謨の「繪」「繡」を分ちて二事と爲す。古者二事分たず，統べて之を「色を設くるの工」<sup>230)</sup>と謂ふのみ。古者「績」を「畫」と訓じ，「繪」を「繡」と訓ず。

220) 集解「馬曰，……，紉，文貌」釋文「紉兮，呼縣反，馬云，文貌，鄭云，文成章曰紉」。

221) 『儀禮』聘禮・記「皆玄纁，繫長尺紉組」注。注下文に「今文紉作約」。

222) 『論語』八佾 釋文(注 220)) 參照。

223) 阮元本は「畫繪」を「繪畫」、「采」を「色」に作り，「分」下に「布」字有り。阮元校勘記に「凡繪畫先布衆色，皇本作畫繪，又色作采」「然後以素分布其間，皇本無布字」。段玉裁は皇本に據るか。

224) 『集注』は「後於素也」下に考工記(畫績)の「繪畫之事，後素功」(阮元本は「繪畫」を「畫績」に作る)を根據として引く。

225) 今韻古分十七部表で許掾切(線韻)は十四部，古十七部諧聲表で句聲は十二部。

226) 糸部。

227) 注 221) 參照。

228) 糸部第四百二十五「紉，許縣切，遠也，又文兒」下に「約，同上」。

229) 去三十二霰・縣(熒絹切)小韻に「紉，縞，采成文也，或从荀」，また紉(翽縣切)小韻に「紉，縞，翽縣切，文兒，說文引詩素以爲紉兮，一曰成也，或从荀，……」。

230) 注 218) 參照。

説「績」下に見ゆ。<sup>231)</sup>

(二) 咎繇謨の文。<sup>232)</sup>

(三) 八佾篇の文。此れ皆な「繪」「繡」二事無きを證する也。

(四) 黃外の切，十五部。

縷，帛文兒<sup>(一)</sup>，詩曰，縷兮斐兮，成是貝錦<sup>(二)</sup>，从糸妻聲<sup>(三)</sup>，

縷，帛の文の兒，詩に曰く，縷たり斐たり，是の貝錦を成すと，糸に従ふ，妻の聲，

(校)「帛」，今二徐「白」に作る。

(一)「帛」各本「白」に作る。今『韻會』<sup>233)</sup>に依りて正す。『韻會』は小徐本を用ふる也。<sup>234)</sup>

(二) 小雅・巷伯の文。今『詩』「縷」を「斐」に作る。毛傳に曰く「斐斐は文章相ひ錯はる也，貝錦は錦文也」，箋に云く「錦文なる者は，餘泉、餘氐の貝文の如き也」と。按ずるに『爾雅』に「餘氐は黃白文，餘泉は白黃文」と。<sup>235)</sup>

(三) 七稽の切，十五部。

緹，繡文如聚細米也<sup>(一)</sup>，从糸米，米亦聲<sup>(二)</sup>，

<sup>ベ</sup>緹，繡文<sup>ベ</sup>細米を聚むるが如き也，糸米に従ふ，米亦た聲，

(一)「繡」は畫を謂ふ也。「米」「緹」疊韻。今 咎繇謨「粉米」に作る。<sup>236)</sup>許見る所の壁中古文「粉、緹」に作る。霽部に「粉」は「畫粉也」と云ひ，<sup>237)</sup>此ここに「緹は繡文 細米を聚むるが如き也」と云ふは，皆な古文尙書の説也。此ここに虞書を言はざる者は，經文已に七篇に見ゆ。「畫粉」は衛宏の説爲り。此れ蓋し亦た衛説か。

(二) 莫禮の切，十五部。

231) 注 212) 参照。

232) 古文尙書では益稷。「繡」字段注 (p.111) 参照。

233) 平八齊・妻 (千西切) 小韻「縷」下引く『説文』説解は「帛文貌」に作る。

234) 小徐の今本は卷二十五を缺き，大徐本で補うため，『韻會』は失われる前の小徐本に據ったとするか。  
235) 釋魚。

236) 古文尙書では益稷。「繡」字段注 (p.111) 参照。

237) 七篇下 59a に「粉，衰衣，山、龍、華蟲、粉，畫粉也，从霽分聲，衛宏説」(二徐「分聲」を「从粉省」に作る)。段注は皋陶謨 (古文尙書では益稷) を引き「鄭注云，畫者爲繪，刺者爲繡，繡與繪各有六，衣用繪，裳用繡，許書繪下云，會五采繡也，藻作璪，粉作粉，米作緹。鄭粉米爲一事，許粉、緹爲二事，鄭説粉米爲繡，許説粉爲畫粉，緹爲繡文如聚米，蓋許時鄭説未出，許以説粉系諸衛宏，但今缺有聞矣，且尙書山龍華蟲不與粉相屬，許書恐轉寫有奪誤」。許書の「藻作璪」は一篇上 28b 玉部「璪，玉飾，如水藻之文，从王卓聲，虞書曰，璪火粉米」。

13b

緋，繪如麥稍色<sup>(一)</sup>，从糸冑聲<sup>(二)</sup>，

絹，繪の麥稍の如き色，糸に従ふ，冑の聲，

(校) 大徐「色」字無し。

(一) 「色」字今補ふ。「色」譌る也，而して俗之を刪るのみ。「絹」自り「緋」に至る廿三篆皆な繪帛の色を言ふ。而して此の「色」字之に先んず。『聲類』「縛」「絹」を溷じて一字と爲す<sup>238)</sup>は，其の義の殊なるを考えざるに由る也。「稍」なる者は「麥の莖也」。<sup>239)</sup> 繪の色麥の莖の青色の如き也。射雉賦に曰く「麥漸漸として以て芒を擢きんづ」又た曰く「薺葉を闕闕す」と<sup>240)</sup>，四月時也。繪の色之の似きを絹と曰ふ。漢人段りて纒字と爲す。<sup>241)</sup>

(二) 吉掾の切，十四部。

纒，帛青黄色也<sup>(一)</sup>，从糸录聲<sup>(二)</sup>，

綠，帛の青黄色也，糸に従ふ，录の聲，

(一) 綠衣の毛傳に曰く「綠は間色」と。<sup>242)</sup> 玉藻の正義に曰く「五方の間色，綠、紅、碧、紫、駟黄是れ也，木青は土黄を剋す，東方の間色は綠爲り，綠色は青黄也，火赤は金白を剋す，南方の間色は紅爲り，紅色は赤白也，金白は木青を剋す，西方の間色は碧，碧色は白青也，水黒は火赤を剋す，北方の間色は紫，紫色は黒赤也，土黄は水黒を剋す，中央の間色は駟黄，駟黄色は黄黒也」と。<sup>243)</sup>

(二) 力玉の切，三部。

纒，帛白青色也<sup>(一)</sup>，从糸夔聲<sup>(二)</sup>，

縹，帛の白青色也，糸に従ふ，夔の聲，

238) 『周禮』天官・内司服「白縛」釋文に「聲類以爲今作絹字」，また『儀禮』聘禮「之縛」釋文に「聲類以爲今正絹字」。「縛」字段注 (p.106) 参照。

239) 七篇上 49b 禾部「稍」說解。段注に「一作薺，潘岳射雉賦曰，闕闕薺葉，是」。

240) 『文選』卷9。「稍」字段注も射雉賦を引く (上注参照)。

241) 七篇下 40a 罔部「纒，罔也，一曰縹也」，段注に「周禮冥氏注曰，弧張罌學之屬，所以局絹禽獸，遷氏注曰，置其所食之物於絹中，鳥來下則掎其腳，亦皆假絹爲纒」。「縹」字段注 (p.117) 参照。

242) 邶風。

243) 「衣正色，裳間色」注「謂冕服玄上纒下」疏。原文は阮元本に據れば「皇氏云，正謂青、赤、黄、白、黒，五方正色也，不正謂五方間色也，綠、紅、碧、紫、駟黄，是也，青是東方正，綠色東方間，東爲木，木色青，木刻土，土黄，並以所刻爲間，或綠也，青黄也，朱是南方正，紅是南方間，南爲火，火赤刻金，金白，故紅色，赤白也，白是西方正，碧是西方間，西爲金，金白刻木，故碧色，青白也，黒是北方正，紫是北方間，北方水，水色黒，水刻火，火赤，故紫色，赤黒也，黄是中央正，駟黄是中央間，中央爲土，土刻水，水黒，故駟黄之色黄黒也」。

（校）「白青」，大徐「青白」に作る。

（一）「白青」各本「青白」に作る。今正す。此れ金 木を剋するの色。剋する所當に下に在るべき也。「縹」、『禮記正義』之を「碧」と謂ふ。<sup>244)</sup>『釋名』に曰く「縹は猶ほ漂のごとし。漂は淺青色也。碧縹有り，天縹有り，骨縹有り，各おの其の色の象る所を以て之を言ふ也」と。<sup>245)</sup>

（二）𦉰沼の切，二部。

縹，帛青經縹緯<sup>(一)</sup>，一曰育陽染也<sup>(二)</sup>，从糸育聲<sup>(三)</sup>，

縹，帛の青經縹緯，一に曰く，育陽の染也，糸に从ふ，育の聲，

（一）「經」なる者は「從絲」<sup>246)</sup>，「緯」なる者は「衡絲」<sup>247)</sup>。

（二）育陽は漢南郡の屬縣。<sup>248)</sup>縣 育水の北に在り，故に育陽と曰ふ。「育」は「縹」と疊韻。「育水」，水部「涓水」に作る。<sup>249)</sup>

（三）余六の切，三部。

14a

緋，純赤也<sup>(一)</sup>，虞書丹朱如此<sup>(二)</sup>，从糸朱聲<sup>(三)</sup>，

緋，純き赤也，虞書の丹朱此くの如し，糸に从ふ，朱の聲，

（一）「純」は「醜」に同じ。厚也。<sup>250)</sup>赤は南方の色也。按ずるに「市」下に云く「天子は朱市，諸侯は赤市」と。<sup>251)</sup>然らば則ち朱は赤と深淺同じからず。爾風「我朱孔陽」，傳に曰く「朱は深き纁也，陽は明也」と。<sup>252)</sup>許云く「纁」なる者は「淺き絳」，「絳」なる者は「大赤」と。<sup>253)</sup>

244) 玉藻正義。「綠」字段注及び上注參照。

245) 釋采帛。

246) 十三篇上 2b 糸部「經，織從絲也」，但し大徐本は「從絲」二字無し。

247) 十三篇上 3b 糸部「緯，織衡絲也」，但し大徐本は「衡」を「橫」に作る。

248) 『漢書』地理志上「南陽郡，……，縣三十六，宛，犇，鄧，育陽，……」，また「南郡，……，縣十八，江陵，臨沮，夷陵，華容，宜城，鄧，當陽，中盧，枝江，襄陽，編，秭歸，夷道，州陵，若，巫，高成」。「育陽」注に「應劭曰，育水出弘農盧氏，南入于沔」。「育陽」は「南陽郡」の縣の中に見え，南郡の縣十八の中に「育陽」の名は無い。「南郡」は「南陽郡」の誤りか。

249) 十一篇上一 19b 水部「涓，涓水，出弘農盧氏山，東南入沔，从水育聲，或曰出鄧山西」（二徐本，說解の「涓」字無し，一篆一行本「沔」を「海」に作る）。段注に「按漢志作育」。

250) 十三篇上 1b 糸部「純，絲也」段注に「按純與醜音同，醇者不澆酒也，段純爲醇字，故班固曰，不變曰醇，不襍曰粹，崔覲說易曰，不襍曰純，不變曰粹，其意一也」。十四篇下 (35a) 西部「醜，不澆酒也」段注に「凡酒沃之以水則薄，不襍以水則曰醇，故厚薄曰醇澆，醇襍亦即此字，一色成體謂之醇，純其段借字」。

251) 七篇下 55a 市部「市，鞶也，上古衣蔽前而已，市呂象之，天子朱市，諸侯赤市，卿大夫蔥衡，从中，象連帶之形」（大徐本「鞶」字無し）。

252) 七月。

253) 「纁」說解（本頁）、「絳」說解（次頁）參照。

蓋し「純き赤」、「大いなる赤」、其の異なる者は微なり。鄭 禮經に注して曰く「凡そ絳を染むるは、一入は之を纒と謂ひ、再入は之を赭と謂ひ、三入は之を纁と謂ふ。朱は則ち四入か」。<sup>254)</sup> 是れ朱を深纁と爲すの説也。凡そ經傳 朱を言ふは皆な當に「絳」に作るべし。「朱」は其の段借字也。「朱」なる者は「赤心の木」也。<sup>255)</sup>

(二)「丹朱」は各繇謨に見ゆ。<sup>256)</sup> 許據る所の壁中古文「丹絳」に作る。蓋し六經の「絳」僅かに此処に見ゆ。「朱」行れ而して「絳」廢れり。

(三) 章俱の切、古音は四部に在り。<sup>257)</sup>

纒、淺絳也<sup>(一)</sup>、从糸熏聲<sup>(二)</sup>、

纁、淺き絳也、糸に从ふ、熏の聲、

(一) 考工記 鍾氏に「三入を纁と爲す」と。『爾雅』に「一染は之を纒と謂ひ、再染は之を赭と謂ひ、三染は之を纁と謂ふ」と。<sup>258)</sup> 鄭 禮に注して曰く「纁裳は淺き絳の裳」也と。<sup>259)</sup>

(二) 許云の切、十三部。『周禮』故書「纁」を「𤑔」に作る。<sup>260)</sup>

緇、絳也<sup>(一)</sup>、从糸出聲<sup>(二)</sup>、

緇、絳也、糸に从ふ、出の聲、

(一) 此れ「緇」の本義、而るに廢れて行はれず。『韻會』「絳」を「縫」に作る<sup>261)</sup> は非也。古へ多く「緇」を段りて「黜」と爲す。<sup>262)</sup>

(二) 丑律の切、十五部。

緇、大赤也<sup>(一)</sup>、从糸彖聲<sup>(二)</sup>、

254) 『儀禮』士冠禮「爵弁服、纁裳、……」注。

255) 六篇上 21b 木部「朱、赤心木、松柏屬、從木、一在其中」。

256) 古文尚書では益稷に見える。阮元本は「丹朱」に作る。「無若丹朱、傲惟慢遊是好」僞孔傳「丹朱、堯子學以戒之」。

257) 章俱切(虞韻)は今韻古分十七部表では五部、朱聲は古十七部諧聲表では四部。

258) 釋器。

259) 『儀禮』士冠禮「爵弁服、纁裳、……」注。

260) 天官・染人「凡染、……、夏纁玄、……」注に「故書纁作𤑔、鄭司農云、𤑔讀當爲纁、纁謂絳也」。『周禮漢讀考』卷1に「此以𤑔不見於他經傳而易其字也、宛聲在十四部、熏聲在十三部、聲略相似、說文黑部有黜字、云、黑有文也、從黑冤聲、讀若飴登之登、黜即𤑔字、故書假借爲纁字也」。「黜」は十篇上 56b 黑部。

261) 入四質・出(尺律切)小韻「緇、說文縫也、……」。

262) 例えば、『禮記』王制「不孝者君緇以爵」(釋文「君緇、丑律反、退也」)、「簡不肖以緇惡」(釋文「以緇、勅律反」)、『左傳』莊公八年「襄公緇之」、『史記』五帝本紀「三歲一考功、三考緇陟、遠近衆功咸興」など。

絳，大赤也，糸に从ふ，夆の聲，

(一)「大赤」なる者は今俗に所謂る「大紅」也。上文「純赤」なる者は今俗に所謂る「朱紅」也。朱紅は淡く，大紅は濃し。大紅は日出づるの色の如く，朱紅は日中するの色の如し。日中するは日出づるより貴し。故に「天子は朱市，諸侯は赤市」。<sup>263</sup>「赤」は即ち絳也。

(二) 古巷の切，九部。

14b

緇，惡絳也<sup>(一)</sup>，从糸官聲<sup>(二)</sup>，一曰纒也<sup>(三)</sup>，讀若雞卵<sup>(四)</sup>，

緇，惡しき絳也，糸に从ふ，官の聲，一に曰く，纒也，讀みて雞卵の若くす，

(校) 大徐本，「惡」下「絳」上に「也」字有り。「纒」，大徐本「緇」に作り，祁刻本「緇」に作る。

(一)「惡」下，各本「也」を衍す。今刪る。此れ「粦」下に「惡しき米也」<sup>264</sup>と云ひ，「繫」下に「惡しき絮」<sup>265</sup>也と云ふが如し。絳色の惡しき者を謂ふ也。

(二) 烏版の切，十四部。

(三)「纒」各本「緇」に作る。今正す。罔部に「纒，一に曰く，緇也」と。<sup>266</sup>二篆轉注爲り。「老」「考」互訓の例也。<sup>267</sup>「纒」字行はれず，多く「緇」を段りて之と爲す。『周禮』鼂氏注<sup>268</sup>「其の食する所の物を緇中に置き，烏來り下れば則と其の脚を倚る」，是れ也。但だ他書 同音相ひ代はるを容可す。淺人此の「纒」を將て改めて「緇」に作れば，則ち「緇」「繪の麥稍の如き色」と訓ず可きが似し。全書の條理知る可からず。許を讀む者思はざる可からず。

263) 七篇下 55a 市部「市」説解（注 251）参照。

264) 七篇上 60a 米部「粦」説解。

265) 十三篇上 33b 糸部「繫，繫紕也，一曰惡絮」。

266) 注 241) 参照。

267) 「老」「考」は『説文』紕の擧げる轉注の例。段玉裁は轉注を互訓と解釋する。

268) 秋官。「各以其物爲媒而倚之」注。

(四)「卵」古へ讀みて關の如くす。「綰」音亦た是くの如し。説卵部に詳かなり。<sup>269)</sup>

縹、帛赤色也<sup>(一)</sup>，从糸瞢聲<sup>(二)</sup>，春秋傳曰縹雲氏<sup>(三)</sup>，禮有縹緣<sup>(四)</sup>，

縹、帛の赤色也，糸に从ふ，瞢の聲，春秋の傳に曰く，縹雲氏と，禮に縹緣有り，

(校)「从糸瞢聲」，二徐本「縹緣」下に在り

(一)南都の賦，臣瓚「赤白色」と云ふを引く。<sup>270)</sup>『玉篇』亦た云く「帛の赤白」と。<sup>271)</sup>皆な誤れり。

「赤白」は則ち下文の「紅」爲り。

(二)即刃の切，十二部。

(三)春秋文十八年『左傳』の文。「黃帝雲を以て紀す。故に雲師爲りて而して雲もて名づく」。<sup>272)</sup>服虔曰く「夏官縹雲氏爲り」。<sup>273)</sup>

(四)凡そ許禮を云ふ者は禮經を謂ふ也。今の所謂る『儀禮』也。十七篇「縹緣」無し。攷を俟つ。「緣」は以絹の切。玉藻に曰く「童子の節也，緇布の衣，錦緣，錦紳並びに紐，錦の束髮，皆な朱錦也」。朱錦緣と爲す。豈に即ち縹緣ならんや。

15a

縹，赤繪也<sup>(一)</sup>，目茜染故謂之縹<sup>(二)</sup>，从糸青聲<sup>(三)</sup>，

縹，赤き繪也，茜<sup>セン</sup>を目て染む，故に之を縹と謂ふ，糸に从ふ，青の聲，

269) 十三篇下 12b 卵部「卵，凡物無乳者卵生，象形，……，𠄎，古文卵」(二徐本に「𠄎」以下無し)。段注に「今依五經文字、九經字樣補，五經文字曰，𠄎，古患反，見詩風，字林不見，又古猛反，見周禮，說文以爲古卵字，九經字樣曰，說文作𠄎，隸變作卵，是唐本說文有此無疑，但張引說文古文卵，刪去文字未安，張之意當云 卵，上說文，下隸變，乃上字誤舉其重文之古文，非是，然正可以證唐時說文之有𠄎，汗簡以𠄎爲古文卵字，與𠄎爲古文風，𠄎爲古文龜皆據本書，郭氏所見說文尙完好也，卵之古音讀如管，引申之，內則濡魚卵醬，鄭曰，卵讀爲鯤，鯤，魚子也，或作攔。韋注國語亦云，鯤，魚子也，內則之魚子，言其未生者，魯語之魚子，言其已生者，其意一也，又引申之，爲詩總角𠄎兮之𠄎，毛傳曰，𠄎，幼穉也，此謂出腹未久，故仍得此稱，如魚之未生已生皆得曰鯤也，又引申之，周禮有𠄎人，鄭曰，𠄎之言礦也，金玉未成器曰𠄎，此謂金玉錫石之樸韞於地中，而精神見於外，如卵之在腹中也，凡漢注云之言者，皆謂其轉注段借之用，以礦釋𠄎，未嘗曰𠄎古文礦，亦未嘗曰𠄎讀爲礦也，自其雙聲以得其義而已，𠄎固讀如管，讀如關也，自劉昌宗、徐仙民讀侯猛、號猛反，謂即礦字，遂失注意，而後有妄人敢於說文礦篆後益之曰，𠄎，古文礦，周禮有𠄎人，則不得不敢於卵篆後徑刪𠄎古文卵，是猶改蘭臺漆書以合其私，其誣經誣許，率天下而昧於六書，不當膺析言破律，亂名改作之誅哉，并從𠄎聲，關從𠄎聲，許說形聲井井有條如是」。

270) 『文選』卷 4。「縹紳之倫」李善注に「漢書音義，臣瓚曰，縹，赤白色」。なお、『漢書』郊祀志上「縹紳者弗道」顏注に「臣瓚曰，縹，赤白色也，……，左氏傳有縹雲氏」。

271) 糸部第四百二十五。

272) 『左傳』昭公十七年傳。注に「黃帝，軒轅氏，姬姓之祖也，黃帝受命有雲瑞，故以雲紀事，百官師長皆以雲爲名號，縹雲氏蓋其一官也」。

273) 『左傳』文公十八年傳「縹雲氏有不才子」注「縹雲，黃帝時官名」疏引く。

（一）定四年『左傳』に「康叔に分つに綺蒨を以てす」と。「蒨は即ち旃也」<sup>274)</sup>。杜曰く「綺は大赤、染草の名に取る也」。襟記注「蒨旃」に作る。<sup>275)</sup>「蒨」は即ち「茜」也。<sup>276)</sup>

（二）「茜」なる者は「茅蒐也」。<sup>277)</sup>韋部又た曰く「茅蒐もて染むる韋，一入を鞣と曰ふ」と。<sup>278)</sup>然らば則ち必ず數入して而る後に之を綺と謂ふ。今其の詳を得ず。「茜」は「綺」と合韻して同音。<sup>279)</sup>故に茜染は之を綺と謂ふ也。

（三）倉紉の切，古音は十一部に在り。茜は十三部に在り。雙聲を以て合韻す。

緹，帛丹黄色也<sup>(一)</sup>，从糸是聲<sup>(二)</sup>，祗，緹或作祗<sup>(三)</sup>，

緹，帛の丹黄色也，糸に从ふ，是の聲，祗，緹或いは祗に作る，

（校）二徐本「也」字無し。

（一）丹にして黄なるを謂ふ也。下文に云く「緹は帛の赤黄色」と。丹赤と同じからざる者は、丹なる者は丹沙の如く、赤と異なりて、其の分甚だ微なり。故に鄭草人注に曰く「赤緹、緹色也」<sup>280)</sup>、酒正「五齊」「四に曰く、緹齊」注に曰く「緹なる者は成りて紅赤、今の下酒の若し」<sup>281)</sup>と。按ずるに紅赤なる者は赤にして白。「緹齊」は純ならざる赤、故に之を紅赤と謂ふ。「緹齊」は俗に「醴」に作る。禮運に見ゆ。<sup>282)</sup>

（二）他禮の切，十六部。

（三）衣に从ふ，氏の聲也。古へ「氏」は「是」と同用す。故に是の聲亦た氏の聲に从ふ。此の篆、衣部「祗襦」の「祗」<sup>283)</sup>と大いに別なり。其の義は則ち彼れ「短衣」と訓じ、其の音は則ち氏の聲、

274) 疏。阮元校勘記に「綺蒨旃旃，鄭氏禮記雜記注引作蒨旃，詩小雅白旃央央，正義云，蒨與旃古今字也，故左傳云，蒨旃旃，蒨亦旃也，石經綺字似改刻，疑初刻作蒨字，按說文云，綺，赤繪也，是綺爲正字。小雅・六月「白旃央央」釋文は「旃」を「蒨」に作り、「白蒨，本又作旃，蒲貝反，繼旃曰蒨，左傳云蒨蒨，是也，一曰，旃與蒨古今字殊」。一篇下 39b 艸部「蒨，艸葉多」段注「詩白旃央央，本又作蒨，泮水之其旃蒨蒨即出車之旃旃旃旃，采菽之其旃泮泮也，然則小弁葍葍泮泮，亦當云葍葍蒨蒨，本言艸葉之多，而引伸之狀旃旃也」。七篇上 15b 旗部「繼旃之旗也，沛然而壘」段注「又假蒨爲旃。如左傳蒨蒨即蒨蒨，詩帛蒨央央即帛蒨是也」。

275) 雜記上「其鞣有蒨」注「鞣，……，舊讀如蒨蒨之蒨，……，蒨，染赤色者也」。

276) 『爾雅』釋草に「茹蘆，茅蒐」郭注に「今之蒨也，可以染絳」。

277) 一篇下 20a 艸部「茜，茅蒐也，从艸西聲」段注に「倉見切，古音在十三部，蒨即茜字也，古音當在十一部，其音變適同耳」。

278) 五篇下 39b 韋部「鞣」字說解は「韋」下「一」上に「也」字有り。

279) 中古音では同音（清母霰韻）だが，古十七部諧聲表では，青聲は十一部，西聲は十三部。

280) 地官。「凡糞種，……，赤緹用羊，……」注。

281) 天官。阮元本は「若」を「如」に作る。

282) 「黍醴在堂」。注に「黍讀爲齊，聲之誤也，周禮五齊，一曰泛齊，二曰醴齊，三曰盎齊，四曰醴齊，五曰沈齊，……」。

283) 八篇上 54b 「祗，祗襦，短衣也，从衣氏聲」段注「都衣切，十五部」。

十五部に在り。氏の聲は十六部に在る也。按ずるに唐石經『周易』「祇にして既に平なり」<sup>284)</sup>、『詩』「祇だ我が心を攪す」<sup>285)</sup>「亦た祇に異を以てす」<sup>286)</sup>、『左傳』「祇に疏んぜ見る也」<sup>287)</sup>、『論語』「亦た祇に異を以てす」<sup>288)</sup>、以て凡そ「適」と訓ずるの字に及ぶまで皆な「衣」「氏」に従ふ。蓋し之を受くる所有り。張參『五經文字』は經典字畫の砥柱也。衣部に曰く「祇、止移の切、適也」と。<sup>289)</sup>『廣韻』<sup>290)</sup>は孫愐『唐韻』「祇、章移の切、適也」と曰ふに本づく。『玉篇』衣部亦た曰く「祇、之移切、適也」と。<sup>291)</sup>舊字相ひ承けて據る可べきことは是くの如し。『集韻』<sup>292)</sup>に至りて「祇、章移の切、適也」と云ひ、始めて「示」に従ふ。然らば恐くは轉寫轉刊の誤り<sup>のみ</sup>耳。『類篇』<sup>293)</sup>に至りて則ち「祇」「祇」二文皆な「適」と訓ず。『韻會』<sup>294)</sup>に至りて而して「示」に従ふの「祇」「適」と訓ず。此れ其の譌りを遞ふるの原委也。「祇」の「適」と訓ずるは其の音同じく十六部に在るを以て而して其の義を得。凡そ古語の書は皆なこれを字音に取り、字の本義を取らず。皆な段借の法也。攷ふるに、毛公我行其野の傳に「祇は適也」と曰ひ、鄭何人斯箋、『論語』注に「祇は適也」と曰ひ、服虔『左傳』襄廿九年解に「祇は適也」と云ひ、王弼坎卦に注して「祇は辭也」と曰ひ、顏師古寶嬰傳注に「祇は適也」<sup>295)</sup>と曰ふ。此れ古字、古言の存する者章章たる也。宋自り以來刊版の書多く省照せず、「衣」改めて「示」に従ふ者少なからず。學者宜しく訂正すべき所。錢氏大昕『養新錄』乃ち云く「『說文』「祇」字無し。『五經文字』、『玉篇』

284) 習坎・九五の象辭。阮元本は「祇」に作る。注に「祇、辭也」、釋文に「祇、音支、又折支反、鄭云、當爲坻、小丘也、京作禔、說文同、音支、又上支反、安也」。阮元校勘記に「閩、監、毛本同、石經、岳本祇作祇、是也、釋文、祇、京作禔」。なお、一篇上(5b)示部「禔」字說解はこの象辭を引いて「禔」に作る。

285) 小雅・何人斯。阮元本は「祇」に作る。箋に「祇、適也」。

286) 小雅・我行其野。阮元本は「祇」に作る。傳に「祇、適也」。阮元校勘記に「小字本、相臺本同、閩本、明監本、毛本同、唐石經祇作祇、案六經正誤云、作祇誤、段玉裁云、祇、適也、凡此訓唐人皆從衣从氏作祇、見五經文字、唐石經、廣韻、集韻、宋以後俗本多作祇、非古也、至各體从氏、則尤繆極矣」。

287) 襄公二十九年傳。阮元本は「祇」に作る。疏に「服虔本作祇見疏、解云、祇、適也、晉宋杜本皆作多、古人多祇同音」。阮元校勘記に「宋本祇作祇、正義引服虔本亦作祇、釋文同、石經作祇、是也、凡唐石經、廣韻皆作祇、从衣从氏、適也、毛誼父六經正誤云、祇作祇誤、祇音低、祇裯、短衣、案祇裯之祇見方言、從氏不從氏、釋文云、本又作多、正義云、晉宋杜本皆作多、古人多祇同音」。

288) 顏淵。阮元本は「祇」に作る。集解に「鄭曰、此詩小雅也、祇、適也」。阮元校勘記に「閩本、北監本、毛本同、案祇當作祇、唐石經作祇、五經文字、廣韻亦作祇」。

289) 卷中・四十六衣部「祇、止移反、適也、作祇訛」(古經解彙函本に據る)。

290) 上平五支・支(章移切)小韻に「祇、適也、又巨支切」。

291) 衣部第四百三十五。

292) 上平五支・支(章移切)小韻に「祇祇、適也或从禾」。

293) 卷一上「祇、章移切、適也、又常支切、病也、一曰安也、又翹夷切、說文地祇提出萬物者也」卷八中「祇、章移切、適也、又翹移切、袈娑謂之祇袂、又土禮切、帛丹黄色」。

294) 平上四支・支(章移切)小韻。

295) 「祇加懟自明」注に「祇、適也、……、祇音支、其字從衣」。

の誤りを承く」と。<sup>296)</sup> 未だ千慮の一失を免れざる耳。<sup>の</sup>「祗」を「祗」に譌り、俗又た「祗」に作る。唐人の詩文之を用ひ、讀みて支の如くす。今則ち改めて「只」を用ひ、讀みて質の如くす。<sup>297)</sup> 此れ古今推移の變也。『史記』韓安國傳に「禔だ辱を取る<sup>の</sup>耳」と云ふ<sup>298)</sup> が若きは此れ「祗」の同音字を用ふ。『周易』「祗にして既に平なり」の如きは、他家「禔」に作り而して其の義を異にせず。<sup>299)</sup> 要是是れ同音。○顔元孫『干祿字書』石本「祗」「祗」注に云ふ「上、神祗、巨移の反、下、適祗、章移の反」と。<sup>300)</sup> 是れ則ち「祗」字唐初に起る。蓋し六朝の俗字なり。

15b

纁、帛赤黄色也<sup>(一)</sup>、一染謂之纁、再染謂之頰、三染謂之纁<sup>(二)</sup>、从糸原聲<sup>(三)</sup>、

纁、帛の赤黄色也、一染は之を纁と謂ひ、再染は之を頰と謂ひ、三染は之を纁と謂ふ、糸に从ふ、原の聲、

(校) 二徐本「也」字無し。

(一) 「赤黄」なる者は赤にして黄也。禮 喪服の注に曰く「纁は淺絳也、練冠して而して麻衣し纁縁するは、三年の練の受飾也」と。<sup>301)</sup> 檀弓の注に曰く「纁は纁の類」と。<sup>302)</sup>

(二) 三句『爾雅』釋器の文。考工記祗だ三入を言ひ、一入再入を言はず。『爾雅』、記の文の未だ備らざる所を補ふ可し。記に云ふ「鍾氏羽を染む、朱を以て丹秬に湛し、三月にして之を熾ぎ、淳ぎて之を漬む、三入を纁と爲す」、鄭記に注して、『爾雅』と「同色耳。<sup>の</sup>布帛を染むる者は染人之を掌る」と。<sup>303)</sup> 鄭に依れば則ち染人布帛を染むるは、鍾氏羽を染むると同じく朱漸の丹秬を用ふる也。古へ茜を以て染むる者は之を「靺」<sup>304)</sup>と謂ひ、之を「緹」<sup>305)</sup>と謂ひ、朱及び丹秬を以て染むる者は之を「纁」「頰」「纁」と謂ふ。「頰」なる者は「赤色也」。<sup>306)</sup> 「纁」

296) 卷1 祗に「說文但有从氏訓短衣之祗、初無祗字也、而張參五經文字衣部承玉篇之誤、亦收此字、訓作適、且以从示爲誤、則大謬矣」。

297) 『增修互註禮部韻略』入五質・質（職日切）小韻に「只、起語辭、又語已辭、又專辭、又紙韻、佩鱗集曰、樂只之只、翻之爾、本無質音、今讀若質、俗所常用、増入」。

298) 集解に「徐廣曰、禔、一作祗也」。

299) 注 284) 引く釋文參照。

300) 原文「適祗」を「祗適」に作る。（古經解彙函本に據る。）

301) 「公子爲其母、練冠麻、麻衣纁縁、爲其妻、纁冠、葛經帶、麻衣纁縁、皆既葬除之」注。

302) 檀弓上「練、練衣、黄裏、纁縁」注。

303) 注原文は阮元本では「爾雅曰、一染謂之纁、再染謂之窺、三染謂之纁、詩云、緇衣之宜兮、玄謂、此同色耳、染布帛者染人掌之」。釋文に「之窺、勅貞反、本又作經、亦作頰」、阮元校勘記に「釋文、窺、本又作經、作頰、按今爾雅作頰○按古段借字也」。

304) 「緹」字注及び注 278) 參照。(p.118)

305) 上篆。

306) 十篇下 3b 赤部「經、赤色也、……、頰、經或从貞」。

なる者は「淺絳也」。<sup>307)</sup>玉藻の「溫韞」<sup>308)</sup>は即ち「韞韞」<sup>309)</sup>也。「溫」<sup>310)</sup>は即ち「緇」の段借字也。「韞」も亦た之を「緇」と謂ふ。

(三) 七絹の切，十四部。

16a

紫，帛青赤色也<sup>(一)</sup>，从糸此聲<sup>(二)</sup>，

紫，帛の青赤色也，糸に従ふ，此の聲，

(校) 二徐本「也」字無し。

(一)「青」當に「黒」に作るべし。穎容『春秋釋例』<sup>311)</sup>に曰く「火は水を畏る。赤黒に入るを以ての故に北の間色は紫也」と。<sup>312)</sup>『論語』皇疏<sup>313)</sup>、玉藻正義<sup>314)</sup>略ほ同じ。此れ「青」に作る者は、蓋し禮器の注に云ふ所の「秦二世時」の語の如し。民言之に従ひ、漢末に至りて猶ほ存するか。<sup>315)</sup>許説必ず誤り無し。轉寫して之を亂す<sup>のみ</sup>耳。

(二) 將此の切，十五部，亦た十六部。<sup>316)</sup>

307) 十三篇上 14a. p.116 参照。

308) 阮元本は「緇韞」に作る。校勘記も無い。「一命緇韞幽衡」注に「緇，赤黄之間色，所謂韞也」，釋文に「緇，音温，赤黄間色」。

309) 『儀禮』士冠禮「爵弁服，纁裳，純衣，緇帶，韞韞」注「韞韞，緇韞也，士緇韞而幽衡，合韞爲之，士染以茅蒐，因以名焉，今齊人名蒨爲韞韞，韞之制似韞」。

310) 「溫」は烏魂切，十三部。

311) 『隋書』經籍志・經・春秋「春秋釋例十卷（漢公車徵士穎容撰）。『後漢書』儒林傳下に「穎容字子嚴，陳國長平人也，……，善春秋左氏，師事太尉楊賜，……，著春秋左氏條例五萬餘言，建安中卒」。

312) 『論語義疏』に「穎子嚴云」として引かれる文とは異同がある。下注参照。

313) 卷5 鄉黨「君子不以紺緌飾，紅紫不以爲褻服」義疏に「鄭注云，紺緌，紫之類也，紅纁之類也，纁所以爲祭服，尊其類也，紺緌石染，不可爲衣飾，紅紫草染，不可爲褻服而已，飾謂純綠也，侃案，五方正色，青、赤、白、黒、黄，五方間色，緑爲青之間，紅爲赤之間，碧爲白之間，紫爲黒之間，緇爲黄之間也，故不用紅紫，言是間色也，所以爲間者，穎子嚴云，東方木，木色青，木剋於土，土色黄，以青加黄，故爲緑，緑爲東方之間也，又南方火，火色赤，火剋金，金色白，以赤加白，故爲紅，紅爲南方間也，又西方金，金色白，金剋木，木色青，以白加青，故爲碧，碧爲西方間也，又北方水，水色黒，水剋火，火色赤，以黒加赤，故爲紫，紫爲北方間也，又中央土，土色黄，土剋水，水色黒，以黄加黒，故爲緇黄，緇黄爲中央間也，緇黄黄黒之色也，又一注云，東甲乙木，南丙丁火，中央戊己土，西庚辛金，北壬癸水，以木剋土，戊以妹己嫁於木甲，是黄入於青，故爲緑也，又火剋金，庚以妹辛嫁於丙，是白入於赤，故爲紅也，又金剋木，甲以妹乙嫁於庚，是青入於白，故爲碧也，又水剋火，丙以妹丁嫁於壬，是赤入於黒，故爲紫也，又土剋水，壬以妹癸嫁於戊，是黒入黄，故爲緇黄者也」。「三代之禮一也，民共由之，或素或青，夏造殷因」注に「變白黒言素青者，秦二世時，趙高欲作亂，或以青爲黒，黒爲黄，民言從之，至今語猶存也」

314) 「緑」字段注及び注 243) 参照。(p.114)

315) 「三代之禮一也，民共由之，或素或青，夏造殷因」注に「變白黒言素青者，秦二世時，趙高欲作亂，或以青爲黒，黒爲黄，民言從之，至今語猶存也」。

316) 今韻古分十七部表で將此切（紙韻）は十六部，古十七部諧聲表で此聲は十五部。

紅，帛赤白色也<sup>(一)</sup>，从糸工聲<sup>(二)</sup>，

紅，帛の赤白色也，糸に从ふ，工の聲，

（校）二徐本「也」字無し。

（一）『春秋釋例』に曰く「金は火を畏る。白赤に入るを以ての故に南方の閒色は紅也」。<sup>317)</sup>『論語』に曰く「紅紫は以て褻服と爲さず」と。<sup>318)</sup>按ずるに此れ今人の所謂の粉紅、桃紅也。

（二）戸公の切，九部。

纁，帛青色也<sup>(一)</sup>，从糸蔥聲<sup>(二)</sup>，

纁，帛の青色也，糸に从ふ，蔥の聲，

（校）二徐本「也」字無し。

（一）『爾雅』「青は之を蔥と謂ふ」と。<sup>319)</sup>「蔥」は即ち「纁」也。<sup>320)</sup>の色蔥なるを謂ふ。蔥は「淺き青」也。深き青は則ち「藍」<sup>321)</sup>と爲す。市部に曰く「大夫は赤市，蔥衡」と。<sup>322)</sup>玉藻の文を用ふる也。<sup>323)</sup>潘岳 藉田賦に「纁犗は縹軛に服す」と。<sup>324)</sup>『廣雅』「絹」，一名「總」。<sup>325)</sup>「纁」に作る者は誤り。

（二）倉紅の切，九部。

16b

紺，帛深青而揚赤色也<sup>(一)</sup>，从糸甘聲<sup>(二)</sup>，

紺，帛の深き青にして赤を揚<sup>あは</sup>す色也，糸に从ふ，甘の聲，

（校）二徐本「而」字無く，「也」字無し。

317) 『論語義疏』の引用とは異なる。典據不明。

318) 鄉黨。

319) 釋器。注「淺青」。

320) 一篇下 48b 艸部「蔥」の音は「纁」と同じく「倉紅切，九部」。

321) 一篇下 8b 艸部「藍，染青艸也」。「深青」の根據は未詳。

322) 七篇下 55a 「市，鞶也，上古衣蔽前而已，市呂象之，天子朱市，諸侯赤市，卿大夫蔥衡，从巾，象連帶之形」。但し，大徐本は「卿」字無く，段注に「卿大夫下當有赤市二字，奪文也」。

323) 「一命縵鞞幽衡，再命赤鞞幽衡，三命赤鞞蔥衡」注「此玄冕，爵弁服之鞶，尊祭服，異其名耳，……，衡，佩玉之衡也，幽讀爲黝，黑謂之黝，青謂之蔥，周禮，公侯伯之卿三命，其大夫再命，其士一命，子男之卿再命，其大夫一命，其士不命」。

324) 卷 7。李善注に「纁犗，帝耕之牛也，說文曰，纁，帛青色，音蔥」。

325) 釋器「縹、纁、鮮支、縹，絹也」。疏證本は「纁」に作る。

(一)「而」字、『文選』の注に依りて補ふ。<sup>326)</sup>「揚」當に「陽」に作るべし。猶ほ「表」と言ふがごとき也。<sup>327)</sup>『釋名』に曰く「紺<sup>カン</sup>は含也、青にして赤を含む色也」。<sup>328)</sup>按ずるに此れ今の天青。亦た之を紅青と謂ふ。許は「陽」と言ひ、劉は「含」と言ふも、其の意一也。纁を以て深青に入れ而して赤の表に見るるを是れ紺と爲す。賈氏の考工疏に云ふ、「纁 赤汁に入れば則ち朱と爲り、赤汁に入れず而して黒汁に入れば則ち紺と爲る」と。<sup>329)</sup>賈説非也。深青に入れば乃ち紺と爲り、黒に入れば乃ち緇と爲る。

(二) 古暗の切、古音は七部に在り。<sup>330)</sup>

縹、帛蒼艾色也<sup>(一)</sup>、从糸昇聲<sup>(二)</sup>、詩曰、縹衣縹巾、未嫁女所服<sup>(三)</sup>、一曰不僭縹<sup>(四)</sup>、薰、縹或从其<sup>(五)</sup>、

縹、帛の蒼艾色也、糸に从ふ、昇の聲、詩に曰く、縹衣縹巾、未だ嫁さざる女服する所、一に曰く、不僭の縹、縹、縹或いは其に从ふ、

(校) 二徐本、「縹」を「縹」に作り、「也」字無く、「昇」を「昇」に作り、「詩」下に「曰」字無し。

(一)「蒼」なる者は「艸色也」。<sup>331)</sup>「艾」なる者は「欠臺也」。<sup>332)</sup>「蒼艾色」は蒼然として艾の如き色を謂ふ、是れを「縹」と爲す。毛傳に「縹巾は蒼艾色」と曰ふは、許本づく所也。鄭箋は則ち「縹は縹文也」と云ふ。<sup>333)</sup>「縹文」なる者は、「文は錯畫也、交文に象る」、今「紋」に作るは是れ也。縹を純らにせず而して紋路は蒼畫もて十字を爲し相ひ交ふ。是れを縹文と爲

326) 卷7 藉田賦「紺轅綴於黛耜」李善注に「説文曰、紺染青而揚赤色也」卷13 鸚鵡賦「紺趾丹脣綠衣翠衿」李善注に「説文曰、紺、深青而揚赤也」。

327) 十二篇上 39b 手部「揚、飛舉也」、十四篇下 1b 自部「陽、高明也」段注「闇之反也」。八篇上 50b 衣部「表、上衣也」段注「上衣者衣之在外者也、……、引伸爲凡外裳之稱」。

328) 釋采帛。

329) 鍾氏「三入爲纁五入爲緇七入爲緇」疏。原文は「凡染纁玄之法取爾雅及此、相兼乃具、按爾雅一染謂之纁、再染謂之緇、三染謂之緇、三入謂之緇、即與此同此、三者皆以丹秬染之、此經及爾雅不言四入及六入、按士冠有朱紘之文、鄭云、朱則四入與、是更以纁入赤汁則爲朱、以無正文、約四入爲朱、故云與以疑之、云論語曰君子不以紺緇飾者、淮南子云、以涅染紺、則黒於涅、涅即黑色也、纁若入赤汁則爲朱、若不入赤而入黒汁則爲紺矣、若更以此紺入黒汁則爲緇、而此五入爲緇、是也、紺、緇相類之物、故連文云、君子不以紺緇飾也、若更以此緇入黒汁即爲玄、則六入爲玄、但無正文、故此注與士冠禮注皆云、玄則六入與、更以此玄入黒汁、則名七入爲緇矣、但緇與玄相類、故禮家每以緇布衣爲玄端也」。

330) 今韻古分十七部表で古暗切(勘韻)は八部、古十七部諧聲表で甘声は八部、「含」の聲符である今聲は七部。

331) 一篇下 38a 艸部「蒼」字説解。段注に「引伸爲凡青黑色之稱」。

332) 一篇下 21a 艸部「艾」字説解。二徐本は「欠」を「冰」に作る。段注本が「欠」に作る根據は『訓讀説文解字注 金冊』第一篇下艸部注(501)参照。

333) 説解引く鄭風・出其東門「縹衣縹巾」傳箋。阮元本は「縹」を「縹」に作る。

す。曹風「其の弁は伊れ騏<sup>334)</sup>」の傳に「騏は騏文也」と曰ひ<sup>335)</sup>、秦風の傳に「騏は綦文也」と曰ひ<sup>336)</sup>、魯頌の傳に「蒼騏を騏と曰ふ」と曰ひ<sup>337)</sup>、顧命「騏弁」に鄭注して「青黒を騏と曰ふ」と曰ひ<sup>338)</sup>、玉藻「綦組紱」に注して「綦文は襍色也」と曰ふ。皆な蒼文を謂ふ也。

(二)「昇」各本「昇」に作り、篆體を併せて「𨔵」に作る。今正す。此れ収部の「昇」<sup>339)</sup>を用て聲と爲し、丌部の「𨔵」<sup>340)</sup>を用て聲と爲すに非ざる也。収部の「昇」は「由缶」の「由」<sup>341)</sup>に従ひて聲と爲す。「由」<sup>342)</sup>に非ず、「鬼頭」の「由」<sup>343)</sup>に非ざる也。「由」は古音第一部に在り。「由」は古音第十五部に在り。此れ紊すこと或る可からざる者也。「其」も亦た古音第一部也。故に「𨔵」字亦た「綦」に作る。經典之を用ふ。徐鉉以て『說文』の或體を補ふ。許本書之れ無し。

334) 十篇上 2b 馬部「騏，馬青驪文，如綦也」。二徐本は「綦」を「博綦」に作る。段注に「不通，今依李善七發注、玄應書卷二卷四卷八正」，また「古多段騏爲綦」。

335) 鳴鳩。箋に「騏當作璩」。釋文に「伊騏，音其，騏，綦文也，說文作璩，云，弁飾，徃徃冒王也，或亦作璩」，また「作璩，音其」。阮元校勘記に「小字本、相臺本同，案當作騏綦文也，釋文伊騏下云，騏，綦文也，正義云，馬之青黑色者謂之騏，此字從馬，則謂弁色如騏馬之文也，此與小戎正義詳略互見耳，……」。下注参照。

336) 小戎「駕我騏驎」傳。釋文「騏，音其，馬騏文也」。阮元本は「綦」を「騏」に作る。『毛詩故訓傳定本小箋』卷 11 は「騏，綦文也」に作り，「此依正義及李善緒白馬賦注」（李善注は『文選』卷 14 緒白馬賦「秀騏齊子」注「毛萋詩傳曰，騏，綦文也，音其」）という。阮元校勘記に「小字本、相臺本同，案當作騏綦文也，正義云，色之青黒者名為綦，馬名為騏，知其色作綦文，考此，則正義本作騏綦文也，以綦解騏，詁訓之法也，釋文云，騏，馬騏文也，以曹鳴鳩釋文訂之，當亦綦之誤。○段玉裁云，騏，騏文也，尸鳩傳同，駟傳亦曰蒼騏曰騏，此皆以騏釋騏，下騏即綦字，綦者蒼艾色，見出其東門傳矣，說文所本也，而此等字皆不作綦者，毛時習用騏字，謂蒼艾色爲綦色，故尚書騏弁、曹風其弁伊騏，皆謂蒼艾色也，此等傳以騏釋騏，正如北風傳以虛釋虛，葛屨傳以要釋要，正是一例，謂此馬名騏者，以其騏文也，詁訓之學必於古今字求之，縞衣綦巾，周人古字，騏文騏弁，漢人今字，鄭風作綦，曹風作騏，字不必畫一也」。

337) 駟「有騏有騏」傳。阮元本「蒼騏」を「蒼祺」に作る。『毛詩故訓傳定本小箋』卷 29 は「蒼騏」に作り，「蒼騏即蒼綦也，小戎傳騏騏文也，正義作綦文，李善緒白馬賦注引同，尸鳩傳騏騏文也，釋文作綦文，顧命馬鄭本作騏弁，枚本作綦弁，是古通段綦爲騏，此傳俗本作蒼祺，誤，今依正義及岳本」という。釋文「有騏，音其，蒼祺曰騏」「蒼祺，音其，字又作騏」。阮元校勘記に「小字本同，閩本、明監本、毛本同，相臺本祺作騏，案釋文云，……，相臺本依之改也，釋文之意以祺為假借字，但考小戎、尸鳩傳騏文皆本是綦文，此傳用字當同，蒼騏亦本是蒼綦也，……，段玉裁云，古假騏為綦，因而以騏釋騏，小戎、尸鳩傳皆同，此亦以虛釋虛、以要釋要之例也」。

338) 「四人綦弁」僞孔傳「綦文鹿子皮弁」疏引く。阮元本は「騏」を「綦」に作る。

339) 三篇上 36b 「昇，舉也，从丌由聲」。但し二徐本は「昇」を「昇」，「由」を「由」に作る。段注に「糸部昇從昇聲。或字作綦。由聲，其聲皆在一部也。」

340) 五篇上 23a 「昇，相付与之約在閣上也，从丌由聲」。二徐本「与」を「與」に作る。段注に「勺部曰，与與予同，予，推予也，與，黨與也，今正」「必至切，十五部」。

341) 十二篇下 52b 由部「由，東楚名缶曰由，象形也」段注「側詞切，一部」。

342) 十二篇下 63a 糸部「繇，隨從也，从糸𠂔聲，由，或繇字」。段注に「余招切，按此音非也，當以周切，三部」。

343) 九篇上 43a 五篇上「由，鬼頭也，象形」段注「敷勿切，十五部」。「昇」の聲符。

渠之の切，一部。『玉篇』「縹」に作る。<sup>344)</sup>

(三) 鄭風 出其東門の文。傳に曰く「縹衣は白色の男服也，綦巾は蒼艾色の女服也」，箋に云く「縹衣綦巾は爲し作る所の者の妻の服也」<sup>345)</sup>と。鄭は毛と異れり。許は毛説を用ひて而して「未嫁」二字を以て毛の意を申ぶ。

(四) 「不借」亦た「薄借」に作る。「薄」音博。禮 喪服の傳に曰く「繩屨なる者は繩菲也」，注に「繩菲は今時の不借也」と云ふ。<sup>346)</sup>『急就篇』「不借」に作り<sup>347)</sup>，『釋名』「搏腊」に作る。<sup>348)</sup>同じきのみ耳。『周禮』弁師注に曰く「璣は讀みて薄借の綦の綦の如くす」。<sup>349)</sup>「不借の綦」は今 艸鞵の褌と云ふが若き也。士喪禮「組綦」注に「綦、屨の係也，屨を拘止する所以也，讀みて馬絆の綦の綦の如くす」と云ひ，<sup>350)</sup>内則「屨，綦を著く」注亦た「綦は屨の繫也」と云ふ。<sup>351)</sup>按ずるに許「一に曰く，屨の系」と云はず而して「不借の綦」を擧ぐる者は俗語曉り易きを以て也。今の小兒の鞵帶の如し。

(五) 大徐補ふ所。攷ふるに，玉部に「璣」有り，艸部に「綦」有れば，<sup>352)</sup>則ち當に大徐の補に依るべき也。

17a

縹，帛如紺色<sup>(一)</sup>，或曰深繪<sup>(二)</sup>，从糸臬聲，讀若臬<sup>(三)</sup>，

縹，帛の紺の如き色，或いは曰く，深き繪と，糸に従ふ，臬の聲，讀みて臬の若くす，

(一) 「紺の如き色」者は紺の如くして紺に別する也。『廣雅』はこれを青の類に糸く。<sup>353)</sup>蓋し

344) 糸部第四百二十五「縹，巨箕切，又巨記切，雜文也」，「縹」下に「綦，同上」。

345) 阮元校勘記に「縹衣綦巾所爲作者之妻服也，小字本、相臺本同，案此所字上當有已字，正義當本云，故言縹衣綦巾已所爲作者之妻服也，已謂詩人自己，今正義脫去所上已字耳」。

346) 「公士大夫之衆臣，爲其君布帶繩屨」傳。疏に「云繩菲今時不借也者，周時人謂之屨，子夏時人謂之菲，漢時謂之不借者，……」。

347) 第十一章「裳韋不借爲牧人。不借者小屨也，……，言著韋裳及不借者卑賤之服，便易於事，宜以牧羊也」。

348) 釋衣服「齊人謂韋屨曰屨，……，不借言賤易有宜各自蓄之，不假借人也，齊人云搏腊，搏腊猶把鮓，麤貌也」。疏證補本「鮓」を「作」に作る。

349) 夏官。「王之皮弁，會五采玉璣」注。

350) 釋文「組綦，音其，一音其記反，注同」。

351) 釋文「著綦，其記反，注及下同屨繫也」。

352) 一篇上 28a 玉部「璣，……，从王綦聲」，一篇下 (16b) 艸部「綦，……，从艸綦聲」，いずれも「綦聲」。

353) 釋器に「碧、縹、紺、縹、……，青也」。『博雅音』「縹，早」。

紺色の青に比して更に深し矣。『禮記』用て澡治の字<sup>354</sup>と爲し、<sup>355</sup>他書用て縹絲の字<sup>356</sup>と爲す。

(二)「深繪」疑ふらくは譌舛有らん。「繪」は「深し」と言ふを得ざる也。

(三)親小の切、二部。按ずるに『廣雅』音「早」<sup>357</sup>『廣韻』<sup>358</sup>同じ。

17b

緇，帛黑色也<sup>(一)</sup>，从糸甝聲<sup>(二)</sup>，

緇，帛の黑色也，糸に从ふ，甝の聲，

(一)「黒」なる者は「北方の色也，火熏ずる所の色也」。<sup>359</sup>考工記に「三入を纁と爲し，五入を緇と爲し，七入を緇と爲す」，鄭注して曰く「玄色なる者は緇緇の間に在り。其れ六入する者か」と。<sup>360</sup>

(二)側持の切，一部。按ずるに玉藻「大夫是水蒼玉を佩びて而して純組の綬」注に「純は當に緇に爲るべし，古文緇字，或いは糸旁の才に作る」，<sup>361</sup>又た『周禮』媒氏「純帛」注に「純は實は緇字也，古へ緇才を以て聲と爲す」，祭統「王后は北郊に蠶し以て純服を供す」注に「純は以て繪の色を見す」，<sup>362</sup>『論語』「今也純」，鄭讀みて「緇」と爲す。<sup>363</sup>鄭の意は今の「紂」字，俗に譌りて「純」に爲る耳。然らば則ち許書當に「紂」篆に爲り，解は「古文の緇，糸に从ふ，才の聲」と云ふべし。而して缺くる者は豈に今書に従ひ故書に従はざるの例か。

纁，帛雀頭色也<sup>(一)</sup>，一曰黻黑色如紺<sup>(二)</sup>，纁<sup>(三)</sup>，淺也<sup>(四)</sup>，讀若讒，从糸龜聲<sup>(五)</sup>，

纁，帛の雀頭の色也，一に曰く，黻かな黑色，紺の如し，纁は淺也，讀みて讒の若くす，糸に从ふ，龜の聲

354) 十一篇上二 37a 水部「澡，洒手也」段注「按或假縹爲澡，如禮記總冠縹纁是」。

355) 雜記上「總冠縹纁」注に「縹當爲澡麻帶經之澡，聲之誤也」。疏「經之縹字，絲旁爲之，非澡治之義，故讀從喪服小記下瘍澡麻帶經之澡」。「澡麻帶經」は『儀禮』喪服傳，注に「澡者治去孳垢，不絕其本也，小記曰，下瘍小功，帶澡麻，不絕其本，屈而反以報之」，釋文に「澡麻，音早」。また喪服小記釋文に「澡麻，本又作藻，音早，一本無麻字」。

356) 十三篇上 1a「縹，繹繭爲絲也」段注に「俗作縹，乃帛如紺色之字」。

357) 注 353) 參照。

358) 上三十二皓・早（子皓切）小韻に「縹，紺色曰縹」。

359) 十篇下 55b 黒部「黒」説解。但し，二徐本に「北方色也」四字無し。段注に「依青、赤、白三部下云東方色，南方色，西方色，黃下亦云地之色，則當有此四字明矣，今補」。

360) 鍾氏。

361) 釋文「而純，讀爲緇，側其反」。

362) 釋文「純服，側其反，注及下純冕同」。

363) 子罕。釋文「也純，順倫反，絲也，鄭作側基反，黒繪也」。また『毛詩』小雅・都人士「臺笠緇撮」箋「緇布爲冠」疏に「論語今也純儉注云，純當爲緇，則緇亦得爲紂帛」。

(校) 二徐本「也」字無く、「敷」を「微」に作る。<sup>364)</sup>

(一) 今經典の「緇」字許無し。「纒」は即ち「緇」字也。考工記「三入を纒と爲し、五入を緇と爲し、七入を緇と爲す」注に「纒を染むる者は三入して成る。又た再染するに黒を以てすれば則ち緇と爲る。緇、今禮の俗文 爵に作る。爵頭の如き色を言ふ也。又た復た再染するに黒を以てすれば、乃ち緇と成る」と。<sup>365)</sup> 士冠禮「爵弁服」注に「爵弁なる者は冕の次、其色赤くして微かに黒く爵頭の如く然り。或いは之を緇と謂ふ」。鄭に依れば則ち「爵」「緇」「纒」三字は一也。三字雙聲。巾車「雀飾」注に曰く「雀は黒多く赤少きの色」と。<sup>366)</sup> 玉裁按ずるに今雀頭を目驗するに色赤くして微かに黒し。

(二) 句。

(三) 逗。

(四) 前の一説 黒多と謂ひ、後の一説 微黒と謂ふは、同じからず、鄭 考工、巾車に注して黒多と謂ひ、士冠禮に注して微黒と謂ふも、亦た同じからざる也。其の實 雀頭は微かに黒き而已。「纒」「淺」亦た雙聲に於て之を求む。猶ほ「竊」の「淺」と訓ずる<sup>367)</sup> がごとき也。江沅曰く「今用て才字と爲す。乃ち淺義の引伸」と。<sup>368)</sup>

(五) 士咸の切、八部。

18a

緇、帛駢色也<sup>(一)</sup>、从糸剌聲<sup>(二)</sup>、詩曰、毳衣如綌<sup>(三)</sup>、

綌、帛の駢色也、糸に从ふ、剌の聲、詩に曰く、毳衣綌の如しと、

(一)「駢」なる者は蒼白色也。馬部に詳かなり。<sup>369)</sup> 釋言に曰く「莢は駢也」。<sup>370)</sup> 王風の毛傳に曰く「莢は駢也、蘆の初めて生ずる者也」。<sup>371)</sup> 艸部に曰く「薊」なる者は「葍の初生」「一に曰く、

364) 「細」字段注及び注 30) 参照。

365) 鍾氏。

366) 阮元本は「色」下に「韋也」二字有り。疏に「云雀黒多赤少之色韋也者、鄭以目驗雀頭黒多赤少、雀即緇也」。

367) 『爾雅』釋獸「虎竊毛謂之竊猫」注に「竊、淺也」。

368) 『説文解字音均表』8。皇清經解續編本「伸」を「申」に作る。

369) 十篇上 3b 馬部「駢、馬蒼黒襍毛」段注に「黒當作白、釋習、毛傳皆云、蒼白襍毛曰駢、蒼者青之近黒者也、白毛與蒼毛相間而生、是爲青馬、雖深於青白襍毛之駢、未黒也、若黒毛與蒼毛相間而生、則幾深黒矣、釋言曰、莢、駢也、王風傳曰、莢、薊也、葍之初生者、艸部曰、薊者葍之初生、一曰駢、此以同色名之、觀葍葍之初生之色、則知蒼白之不可易矣○六書故云、徐本作白、正謂唐本不作白也」。

370) 郭注「詩曰、毳衣如莢、莢、草色如駢、在青白之間」。

371) 大車「毳衣如莢」傳。阮元本は「駢」を「駢」に作る。『毛詩故訓傳定本小箋』卷 6 も「駢」を「駢」に作り「程氏瑤田曰、駢當作駢、馬蒼白雜毛曰駢、取其同色、蘆之初生者也」という。

騅」と。<sup>372)</sup> 帛の色 薊の如し、故に之を「騅色」と謂ひ、之を「𦉳」と謂ふ也。其の「薊」と同音なるに取る也。

(二) 土敢の切、八部。

(三) 王風 大車の文。按ずるに此の十字當に「糸、薊の省に从ふ、詩に曰く、毳衣薊の如しと」に作るべし。會意の旨を説き、復た之を證するに『詩』を以てす。「薊」<sup>373)</sup>「𦉳」<sup>374)</sup> 易を引くの例の如し。若し今本の如ければ、則ち色固り𦉳、何ぞ「𦉳の如し」と云ひ、且つ詩毛氏を脩するや。毛固り「莢」に作る。何ぞ云ひて毛を脩するや。

緌、帛𦉳艸染色也<sup>(一)</sup>、从糸戾聲<sup>(二)</sup>、

緌、帛の𦉳艸もて染むる色也、糸に从ふ、戾の聲

(校)「𦉳」、小徐本「艾」に作り、大徐本「戾」に作る。「也」、二徐本無し。

(一)「𦉳」、各本「戾」に譌る。『韻會』「艾」に譌る。<sup>375)</sup> 今正す。艸部に「𦉳は艸、以て留黄を染むる可し」。<sup>376)</sup> 染め成るを是れ「緌」と爲す。「緌」は「𦉳」と疊韻、「留」と雙聲。「留黄」或いは「駟黄」に作り、<sup>377)</sup> 或いは「流黄」に作る。<sup>378)</sup> 皇侃「緌黄」に作る。<sup>379)</sup> 蓋し即ち雜黄の色。「其の色 黎黒にして而して黄」<sup>380)</sup> 也。『漢』百官公卿表、諸侯王は「金璽整綬」、如淳曰く「整、音戾、綠整也<sup>381)</sup>、綠を以て質と爲す」、晉灼曰く「整は艸の名也、艾に似て綠を染むる可し、因りて以て綬の名と爲す」。<sup>382)</sup> 按ずるに綠は黄に近し。綠は質と爲し而して黒を染む。故に駟

372) 一篇下 25b 艸部「薊、藿之初生、一曰薊、一曰騅」。二徐本は「騅」を「騅」に作る。段注「騅各本作騅、今依爾雅、兩一曰謂薊之一名也、……、薊與騅皆言其青色」。

373) 一篇下 42b 艸部「薊、艸木生箸土、从艸麗聲、易曰、百穀艸木麗於地」。「生箸」、大徐本は「相附薊」、小徐本は「相附麗」に作る。段注に「此依韻會引」、また「此當云、從艸麗、麗亦聲」「此引易象傳說從艸麗之意也」と。

374) 七篇下 7b 宀部「大屋也、从宀豐聲、易曰、豐其屋」。段注に「此以形聲包會意。當云从宀豐、豐亦聲也」、また「豐上六爻辭、稱此說𦉳从宀豐會意之旨、宀、屋也、豐、大也、故𦉳之訓曰大屋、此與稱百穀艸木麗於地說薊从艸麗同意、……、大小徐皆於引易作薊、𦉳之字、其繆非一日矣」と。

375) 去八霽・麗（郎計切）小韻「緌、說文帛艾草染色、从糸戾聲、……」。

376) 一篇下 12a 「𦉳」說解。各本「艸」下に「也」字有り。段注「郎計切、十五部」。

377) 例えば、『禮記』玉藻疏引く皇侃說。注 243) 參照。

378) 例えば、『文選』卷 16 別賦に「晦高臺之流黄」、注に「環濟要略曰、間色有五、紺、紅、縹、紫、流黄也」。

379) 例えば、『論語義疏』卷 5、穎容『春秋釋例』引用箇所。注 313) 參照。

380) 四篇上 28a 隹部「雞、雞黄也、……、一曰楚雀也、其色黎黒而黄」。

381) 『漢書』顔注引く所は「綠整」を「整綠」に作る。

382) 顔注は兩説を引き「師古曰、晉說是也」という。

黄と曰ふ。中央の間色。何承天『纂文』<sup>383)</sup>に「緌は紫色」と云ふ<sup>384)</sup>は非也。漢の制、緑緌綬は紫綬の上に在り。<sup>385)</sup>紫綬は一名縹綬、其の色は青紫。<sup>386)</sup>

(二) 按ずるに「戻の聲」當に「戻の省」に作るべし。會意にして形聲を包める也。郎計の切、十五部。

18b

緌、白蠶衣兒<sup>(一)</sup>、从糸不聲<sup>(二)</sup>、詩曰、素衣其緌<sup>(三)</sup>、

緌、白く蠶かなる衣の兒、糸に从ふ、不の聲、詩に曰く、素衣其れ緌たりと、

(校)「蠶」、二徐本「鮮」に作る。

(一)「蠶」各本「鮮」に作る。今正す。許の例は新鮮の字此くの如く作る也。<sup>387)</sup>『毛詩』の傳に曰く「絲衣は祭服也、緌は絜鮮なる兒」。<sup>388)</sup>

(二) 匹丘の切、古音は一部に在り。<sup>389)</sup>

(三) 周頌「絲衣」に作る。「絲衣」は乃ち篇名。「素」<sup>390)</sup>、恐らくは譌字ならん。此れ士の爵弁玄衣纁裳を謂ひ、<sup>391)</sup>白衣に非ざる也。本義は「白く鮮かなる」を謂ひ、之を引申して凡そ新衣の稱と爲す。

緌、白蠶衣兒、从糸炎聲<sup>(一)</sup>、謂衣采色鮮也<sup>(二)</sup>、

緌、白く蠶かなる衣の兒、糸に从ふ、炎の聲、衣の采色鮮かなるを謂ふ也、

(校)「蠶」、二徐本「鮮」に作る。

383) 『宋史』卷 64 に傳有り。『清史稿』藝文志・經部・小學類字書之屬に「宋何承天纂文一卷」あり。

384) 『後漢書』輿服志下「諸國貴人、相國皆綠綬、……」注に『漢書』百官公卿表上「綠綬」を引き、「徐廣曰、金印綠緌綬、緌音戻、草名也、以染似綠、又云似紫。紫綬名縹綬、音瓜、其色青紫、……、何承天云、縹音媧、青紫色綬、緌、紫色也」。

385) 『漢書』百官公卿表上に「高帝即位、置一丞相、十一年更名相國、綠綬、……、成帝綬和元年賜大司馬金印紫綬、……」。

386) 注 384) 引く『後漢書』輿服志下注參照。

387) 十一篇下魚部に「鮮、鮮魚也、出貉國」(25a)「蠶、新魚精也」(29b)。「鮮」字段注に「按此乃魚名、經傳乃段爲新蠶字、又段爲黠少字、而本義廢矣」、「蠶」字段注に「云精者即今之鯖字、……、引申爲凡物新者之稱、……、凡鮮明、鮮新字皆當作蠶、自漢人始以鮮代蠶、如周禮經作蠶、注作鮮是其證、至說文全書不用段借字、……、今則鮮行而蠶廢矣」。いずれも「相然切、十四部」。

388) 周頌・絲衣「絲衣其緌」傳。

389) 今韻古分十七部表で匹丘切(尤韻)は三部、古十七部諧聲表で不声は一部。

390) 「絜」字段注及び注 130) 參照。

391) 絲衣の傳の疏に「傳雖不解弁、亦當以爲爵弁、爵弁之服玄衣纁裳、皆以絲爲之、故云絲衣也」。また『禮記』禮器に「禮有以文爲貴者、……、士玄衣纁裳」。

（一）充多の切，八部。『廣韻』「他甘の切」。<sup>392)</sup>

（二）六字は蓋し許の語に非ず。『玉篇』<sup>393)</sup>に依れば則ち「白く鮮かなる衣の兒」四字は當に「衣の采色鮮かなる也」五字に作るべし。

繻，繪采色也<sup>(一)</sup>，从糸需聲<sup>(二)</sup>，讀若繻有衣<sup>(三)</sup>，

繻，繪の采色也，糸に从ふ，需の聲，讀みて繻有衣の若くす，

（校）二徐本，「也」字無し。二徐本「若」下に「易」字有り。

（一）此れ本義也。『左傳』「紀裂繻」<sup>394)</sup>，大夫「裂繻」を以て名と爲す。此の「繻」は乃ち「輸」の段借。巾部に「輸」は繪端の裂也と曰ふ<sup>395)</sup>は是れ也。終軍の傳に「關吏軍に繻を與ふ」，蘇林曰く「繻は帛の邊也。舊と關の出入は皆な傳を以てす。傳は裂繻の頭に因り，合して以て符信と爲す也」と。<sup>396)</sup>即ち『左氏』の「裂繻」字，正に當に「輸」に作るべし。是を以て二傳「綸」に作る。<sup>397)</sup>

（二）相兪の切，古音は四部に在り。<sup>398)</sup>

（三）『周易』既濟六四の文。<sup>399)</sup>蓋し譌奪有り。之を證するに「祭」篆下に併する所をもつてすれば，則ち「繻」當に「需」に作るべし。「衣」下「祭」字を奪す。<sup>400)</sup>

繻，繻采飾也<sup>(一)</sup>，从糸辱聲<sup>(二)</sup>，

繻，繻なる采飾也，糸に从ふ，辱の聲，

（校）「飾」，二徐本「色」に作る。

392) 下平二十三談・韻(他酣切)に「綌，色鮮」というのが他甘切。そのほか，下平二十四鹽・韻(處古切)小韻に「綌，衣色鮮」上四十九敢・韻(吐敢切)小韻に「綌，青黄色，說文，充三切，白鮮衣兒」。

393) 糸部第四百二十五「綌，他酣切，衣綌色鮮也，又衣兒」。

394) 隱公二年經「九月紀裂繻來逆女」注「裂繻，紀大夫」釋文「紀裂，音列」「繻，音須」。

395) 七篇下 48b 巾部「輸，正褳裂也」。二徐本は「褳」を「端」に作る。いずれもこの引用とは異なる。段注に「褳各本作端，今正，衣部曰，褳，衣正幅也，此謂帛之正褳，以別於上文帋謂殘帛之裂」「山樞切，古音在四部」。

396) 『漢書』は「與」を「予」に作る。注に「張晏曰，繻音須，繻，符也，書帛裂而分之，若券契矣，蘇林曰，繻，帛邊也，舊關出入皆以傳，傳須，因裂繻頭合以為符信也，師古曰，蘇說是也。」校勘記「須，景祐殿本都作煩。王先謙說作煩，是」。

397) 『公羊傳』『穀梁傳』隱公二年は『左傳』の「裂繻」を「履綸」に作る。

398) 今韻古分十七部表で相兪切(虞韻)は五部，古十七部諧聲表で需聲は四部。

399) 阮元本は「繻有衣褳」に作る。釋文に「繻有，而朱反，鄭、王肅云，音須，子夏作褳，王虞同，薛云，古文作繻」「衣褳，女居反，絲褳也，王肅音如，說文作祭，云，繻也，廣雅云，祭，塞也，子夏作茹，京作祭」。注に「繻宜曰濡，衣褳，所以塞舟漏也」。注に従って讀めば「繻るるに衣褳有り」か。

400) 十三篇上 37b 糸部「祭，裂繻也，一曰敝祭也，……，易曰，需有衣祭」。

(一) 「飾」各本「色」に作る。今『文選』西京の賦<sup>401)</sup>、月の賦<sup>402)</sup>、景福殿の賦<sup>403)</sup>、劉越石盧諶に荅ふる詩<sup>404)</sup>の注に依りて正す。「繇」本と「馬髦の飾」<sup>405)</sup>と訓じ、之を引申して縹多と爲す。「飾」本と「収也」<sup>406)</sup>と訓じ、之を引申して文飾と爲す。喪服の傳に曰く「成人を喪する者は其の文縹にし、未成人を喪する者は其の文縹にせず」、注に曰く「縹は猶ほ數のごとき也」と。<sup>407)</sup>按ずるに「數」は「數罟」<sup>408)</sup>の「數」の如し。

(二) 而蜀の切、三部。○按ずるに「縵」「繡」二篆自り此に至るまで皆な文采と色の同じからざるを言ふ。

## 使用テキスト

### 『説文解字注』

嘉慶二十年經韻樓本影印（上海古籍出版社，1981年）

必要に応じて、下の版本を参照

嘉慶二十年經韻樓本影印（藝文印書館，1981年）

皇清經解本

同治六年保息局補刊本

### 『十三經注疏』

阮元本影印（藝文印書館，1989年）

### 『經典釋文』

通志堂本

必要に応じて宋刻宋元遞修本を参照。

本稿はJSPS 科研費 JP18K00349 の助成を受けたものである。

---

401) 卷2。「采飾織縹」李善注「説文曰、縹、繁采飾也、音辱」。

402) 卷13。「列宿掩縹」李善注「説文曰、縹、繁采飾也」

403) 卷11。「織縹紛敷」李善注「説文曰、縹、采飾也」。

404) 卷25。「緑葉繁縹」李善注「説文曰、縹、繁采飾也」。

405) 十三篇上30b糸部「繇」説解。

406) 七篇下50a巾部「飾」説解。

407) 釋文「猶敷、音朔、下同」。

408) 『毛詩』小雅・魚麗「魚麗于罟罟」傳「庶人不數罟」釋文に「不敷、七欲反、又所角反、陳氏云、敷、細也」。『孟子』梁惠王上「數罟不入洿池」注「數罟、密網也」。